中學

國文教科書

卷一

41784
教科書文庫
4
810
41-1926
200030
2011

教科書文庫
4
810
41-1926
2000302011

fujitani

資 料 室

3759
Y019

文部省檢定濟
大正十五年二月十日 中學校國語科教科書

吉田彌平編

中學國文教科書

巻一

東京 光風館藏版

例言

本書は中學校國語科の講讀用教科書として、文部省で定められた教授要目に據つて編纂したものです。

全卷を通じて中心になつて居るのは現代文です。　なほ生徒の學力に應じて各時代を代表する文學をも採りました。　そして最後に國文學史の大要を附說する仕組にしました。

本書の句讀や送假名は國定小學讀本を標準としました。

地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會に必要なものは成るべく挿入しました。　肖像や筆蹟なども賢哲名流の俤を偲ぶよすがになるものはつとめて取入れました。

候文・韻文は多く行草の筆記體で出しました。　筆者は阪正臣・大口鯛

廣島大學圖書之印
広島大学 教 38372 図書
広島大学図書
2000302011

二、尾上八郎・岡山高蔭・三宅喜代太・山口彥總の諸氏です。

各課の題目の下には作家の氏名又は雅號を記し、文の終りには出所を示して置きました。編纂の都合で原文の姿のかはつて來たものは唯據る所のみを記すことにしました。

原文に對しては十分の敬意を表しながらも、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならないことのありましたのは、甚だ不本意でありますが、本書の性質上、まことに已むを得ないことですから、偏に諸家の寛恕を請ふ次第であります。

大正十四年十月

中學國文教科書　卷一

目次

一　美しい國……一頁
二　川逍遙……島崎藤村　四
三　自然の風物……八
　一　川……千家元麿　八
　二　春の草……三木羅風　一〇
四　比叡の鳥……高濱虛子　一三
五　桃山御陵に詣でて……八波則吉　一六

六　スポーツマンとしての攝政宮殿下……大谷武一　三
七　競漕……久米正雄　二七
八　ポチ……長谷川二葉亭　四〇
九　さあ一雄君……柳澤健　四七
一〇　芝生……吉村冬彦　五一
一一　生きた額面……土岐善麿　五七
一二　川狩……德川義親　六三
一三　螢の王國……高濱虚子　六六
一四　夏の夜……土井晩翠　七三
一五　童心……北原白秋　七六

一六　大儒息軒先生……森林太郎　八一
一七　日本アルプスの一夜……窪田空穗　九九
一八　山の歡喜……河井醉茗　一〇三
一九　月見草……阿部次郎　一〇六
二〇　鳥飼藏人……五十嵐力　一〇九
二一　太白山の激戰……櫻井忠溫　一一三
二二　汝の母……　一二〇
二三　芙蓉の花……西條八十　一二九
二四　猫……夏目漱石　一三一
二五　螽蟖と蛞蝓……坪内逍遙　一三八
二六　保昌と袴垂……荻野由之　一四四

二七 かゞやく朝……高村光太郎 一四九
二八 秋の輕井澤……鶴見祐輔 一五七
二九 十國峠……高山樗牛 一六四
三〇 明治天皇の御遺物……笠井信一 一六七
三一 波に咲く花……吉江孤雁 一七八
三二 水の都……大類伸 一八九

南島大學圖書之印

中學國文教科書 卷一

一 美しい國

我が國は美しい國である。風景のよい處が甚だ多い。さうしてそのよいといふにもまた色々ある。或は華麗、或は優美、或は雄大、それ〴〵その趣がちがふ。

花の上野や嵐山、紅葉の高雄や日光、是等の風景は何れも華麗である。しかしその最も華麗なものといへば、やはり花の吉野山であらう。

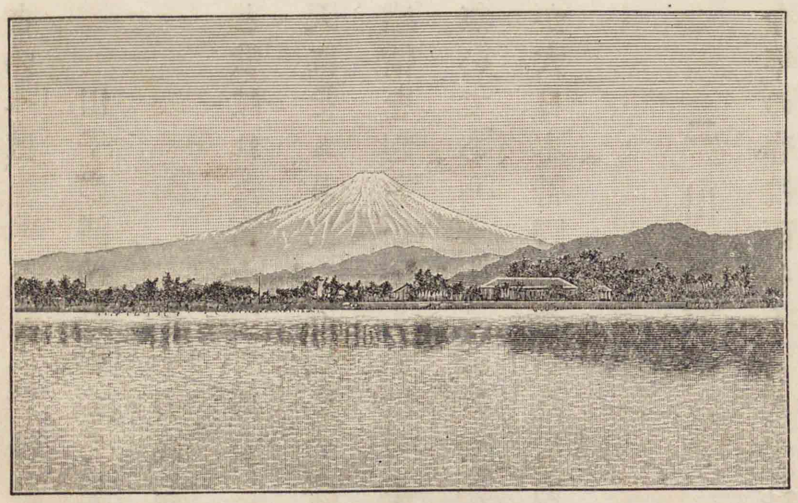
四月の半ばごろ、吉野山に登つて、一目

これはこれはとばかり花の吉野山（貞室）

千本あたりから眺めると、峰といふ峰、谷といふ谷、見渡すかぎり一面に薄紅の雲か霞か。たゞもう、これは〳〵とばかり。何ともいふにいはれぬ美しさである。

松島・嚴島・天橋立は日本三景と稱へられ、琵琶湖のほとりは近江八景とたゝへられて居る。是等は何れも優美な風景である。しかし、それより更に優美なのは舞子あたりの風景であらう。白い砂に青い松、静かな海に滑る船、眉墨の様な山に盆石の様な島、まるで一幅の大和繪。眺めて居る身もいつしか畫の中の人になつて居る。

雄大なものは萬丈の煙が大空を衝いて立ちのぼる淺間の山や阿蘇の峰、百雷の轟きわたる大鳴門・小鳴門、天上から天



富士山

の河を切つて落したかと疑はれる華嚴の瀧、那智の瀧、さては地軸も折れよ、大地も碎けよとばかり怒濤の打寄せ打返す金華山・犬吠岬などのながめであらう。

さうして此の華麗優美・雄大の三つを兼ね備へた大風景が我が國には一つあるのである。それは何か

田子の浦ゆ　山部赤人の歌

島崎藤村　名は春樹　文學者　詩人　明治五年長野縣木曾生

といへば、

　田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ
　　富士の高嶺に雪は降りける。

と歌はれた富士山である。彼の千古の雪を戴いて東海の天にそゝり立つけだかい姿を仰ぎ見ては、あゝ貴いといふ感情を起さないものは、日本人は勿論、恐らくは外國人にも無いであらう。このけだかい貴い富士の高嶺こそ實に我が大日本帝國のすがたである。

二　川逍遙

島崎藤村

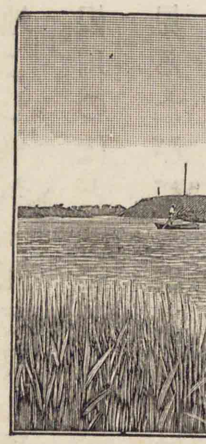
今年の春は雨多く、ともすれば空曇りて快晴といふべき日和は少なかりしを、珍しくも今日は雲斂りて、空の色、眼に心地よし。かゝれば興も涌上り、足も浮立ち、友に誘はれて利根川のほとりに遊ぶ。

見るたびごとに新しきは、朽ちず盡きざる自然のさまなりけり。殊に雨收りての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、いづれも皆綠うるはしき若葉をのべて、活きて自然の大氣を呼吸するかと疑はる。花やかに照す日の光のうるはしさよ。やはらかに吹きわたる春の風の心地よさよ。

やがて利根川のほとりに出づれば、楊柳の花咲滿ちたり。高き岸に登りて眺むるに、遠き山々、近き村々、何れも一眸の中に收りて、携へ來れる雙眼鏡に入る桃の花のけしきえも

蠶飼川 下野から出て常陸下總の境を流れて利根川に入る川
戸田井 茨城縣北相馬郡小文間村の東にある渡の名
羽根野 茨城縣北相馬郡曾根村の大字

言はず。蠶飼川は小貝川とも書けり。流れて利根川に入るあたりは、左に戸田井の柳萌え出でたるを見渡し、右に羽根野の漁家を眺め、菜の花水に映りて、物洗ふ女もおのづから風情を添へたり。小舟を水に浮べて魚釣らんと糸を垂れたるさま、籠を背負ひ、襷の目だちたるをかけたるが椿の花のかげを歌ひ行くさま、煙草のみたる農夫の心安きさま、柳に繫がれたる馬



戸田井の渡

の勇ましく嘶くさまなど、げに車東西に馳せまどひ、石炭の煙空を覆へる都の空とは事かはり、かゝる田舍ならでは見らるまじき景なり。われは友と共にこなたの岸をゆき、かなたの岸をつたひて、日一日河のほとりに眺め暮しぬ。馬を牽き鋤を肩にしたる農夫のあとより、眺めあかぬ川のほとりに沿うて歸るに、にはかに鳴出したる蛙の聲に誘はれて、友の指さすかなたを打見やれば、かなたに立てる野中の一つ家あり。藁ぶきの屋根春の星を帶びて、さびしきうちにもいとのどかなるは、いかなる人の住めるにかと心にくし。(藤村文集)

千家元麿 詩人 明治二十一年東京生

三 自然の風物

一 川

千家元麿

川、川、
清い川、
おまへは波立ち、
樂しげに走つてゆく。
笛のやうに歌ひながら、
曲つたり、眞直になつたり、
少しも休まず
流れてゆく清い水よ、

おゝ、樂しげに、輕らかに、
みんなで跳上つて障害物を越えたり、
輪を卷いて踊つたり、
急に輪をほどいて走り出したり、
狂ふやうに樂しく興奮して
先へ〳〵と笛を吹いて走つてゆく
美しい水の精よ。
純潔に、平靜に、
輕らかに、屈託も無く
樂しい旅をしてゆく川よ、
走れ、走れ、

足並揃へて。（炎天）

三木羅風　名は操　もとの號は露風　詩人　明治二十二年兵庫縣生

二　春の草

三木羅風

萌えよ、萌えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
あたらし夢をはぐくみて、
春の生命(いのち)をのばせかし。

長き眠の冬の土、
いつしか覺めてよみがへり、
芽をふく千草、八千ぐさの
生の力の不思議さよ。

文部省檢定濟

大正十五年二月十日 中學校國語科教科書

吉田彌平編

中學國文教科書

巻一

東京 光風館藏版

小川の水は温みたり、
日は晴れ空は薄霞み、
鶇や、鶸や、鶯や、
さやかにあそぶ彌生月。
萌えよ、萌えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
綠の褥をしきつらね、
若き生命を飾れかし。（青き樹かげ）

fujitani

高濱虛子　名は清　俳人　文學者　明治七年愛媛縣松山市生

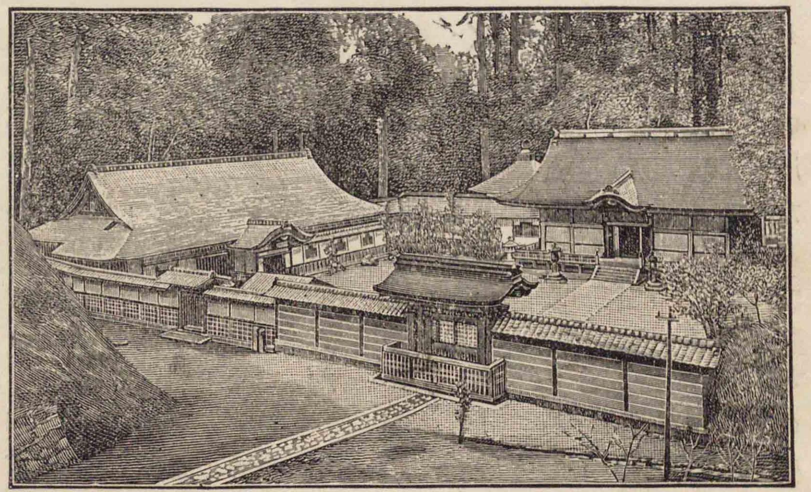
部屋　比叡山東塔の宿院

四　比叡の鳥

高濱虛子

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が部屋一杯にはいつて居る。湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりや丶高く、や丶低く、數知れぬ杉の梢が鉾のやうに突つ立つて居る。左手には北谷の向ふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れて居る。空氣がいやが上に淸いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の杜も、新鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の呼吸の外うき世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地を我が物顏に啼きさへづつて居るのは小鳥だ。何といふかはい丶聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが殘念だ。その杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じて居る。よく耳をすますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうに、別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、またりりしい所があつて、その聲の空山に響く趣が何ともいへぬ。



比叡山延暦寺

これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽四羽と段段聲の主が殖えて來る。前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は横絲だ。互に錯綜してよく諧調を保つ所が面白い。突然けん〳〵とけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ、山鳥で

でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹をたゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くしてその聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとのとほり靜かになる。

眞先にその靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、また縱絲を織つて前の小鳥が啼く。また横絲を織つて次の小鳥が啼く。絣が鳴く。縱絲が鳴く。横絲が鳴く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似て居て、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかとも思はれる。

八波則吉　國文學者　當時は第四高等學校教授　現在は第五高等學校教授　明治九年福岡縣生

他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといつた、二人の小僧は山鳩だらうといつた。

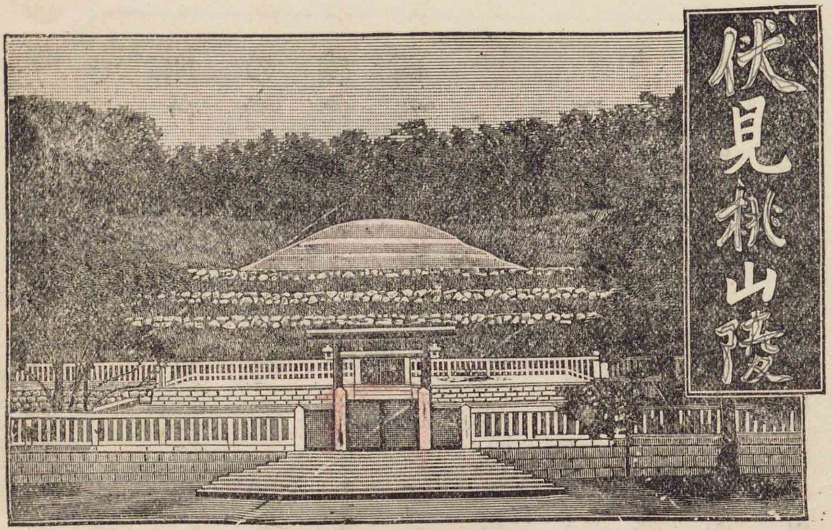
湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つて居る。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで來て、だん／＼と谷が深く見えて來る。（新寫生文）

五　桃山御陵に詣でて

八波則吉

母樣。豫定の如く昨朝八時無事に歸宅致しました。

一昨日桃山の停車場から繪葉書でお知らせ申しました通り、此度當校の職員生徒合せて六百三十餘名、桃山



伏見桃山御陵

御陵を參拜しました。

特別仕立の列車でしたから、途中は只四五個所の大きな驛に停車しただけで、多くの驛を拔きにしたのは、北陸線では私に始めての經驗でした。月明かに星稀に、氣は澄み心はさえて、終夜何とも形容の出來ぬ一種清爽の思に滿ちまし

東の野に
柿本人麿の歌

た。是も私には十幾回の旅行に曾て覺えのないことでした。

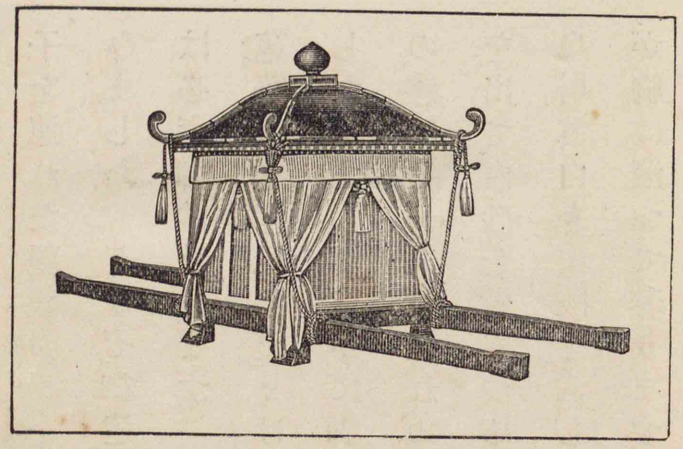
明け方京都で奈良線に乘りかへました。今しも東山の巓に登る朝日の姿。雄大、莊嚴、言語に絕した壯美の感に、吾知らずあつと申しました。顧みれば月はなほ西の空に淡い光を放つてゐるのでした。

東(ひがし)の野(ぬ)に陽炎(かぎろひ)の立つ見えて、
かへりみすれば月傾きぬ。

といふ古歌もなるほどと合點されました。

桃山の停車場に着くや否や、私の胸を衝いたのは祭場殿の設けでした。廣庭・白砂・假小屋・幔幕、凡そ是等を只

一目見た時、私の胸は急に詰つて、眼鏡は忽ち曇つたのです。御聞き遊ばせ、靈柩を奉安して傾斜鐵道に依つて御陵の御須屋(おすや)に移し奉つたと承る其の折の臺車も、軌道の一部分も、目前其處に据ゑおかれてあるではございませんか。



葱華輦

母樣。御陵を參拜してまづ何より先に思ひましたのは、母樣と御一緒に參拜したいといふことでした。

藤井先生　京都帝國大學教授文學博士藤井乙男

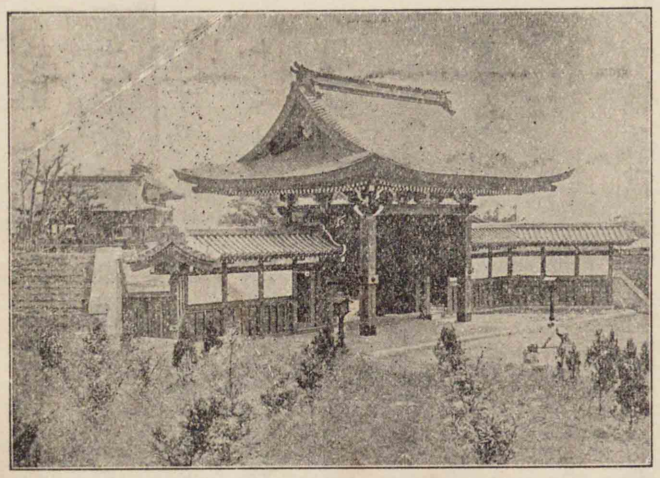
日に幾萬といふ參拜者で、それは〳〵大した人です。子を連れた親、親の手を引く子、私は是非御一緒にと思ひました。どうぞ御達者でいらしつて下さい。來春は必ず御供致します。

葱華輦を拜見しただけでも非常に深い感じを起しました。まして遙かに御須屋を禮拜した瞬間、森嚴崇高の感に誰一人打たれぬものがございませう。竹の林を出て、白砂を敷きつめた御陵の廣庭に立つて、松青く鳥居眞白き山陵を伏し拜めば、知らず識らず敬虔の情が胸に漲つて參ります。

京都で數時間自由散歩の時間を得ましたから、藤井先

下鴨　官幣大社下鴨神社　京都市上京區下鴨町に鎮座

生を訪ねて、その御案內で下鴨へ參詣しました。夜の八時五十分東本願寺に集合して、九時過、再び夜行で歸途に就きました。六百餘名が蜘蛛の子を散らしたやうに京都の市中で別れましたが、定刻には一人も後れず集つたのです。



伏見桃山乃木神社

金澤の停車場前で、校長が一行に對して滯りなく參拜を遂げたことを喜ぶ旨を心から愉快さうに述べら

大谷武一　體育家　體育研究所技師兼東京高等師範學校教授　明治十九年兵庫縣生

れました。そして解散したのです。桃山には繪葉書屋が何百となく軒を並べてゐました。土產物は繪葉書が重なやうです。そして繪葉書には必ず乃木大將のが附きものになつてゐます。尤なことです。乃木大將の御墓が御陵の附近にあつたらと思ひました。左樣なら。御機嫌よう。（趣味と修養）

六　スポーツマンとしての攝政宮殿下

大谷武一

我が攝政宮殿下が、政治・產業軍事及び教育等の各般の問題を通じて深き御理會を有し給ふことは、吾々國民の齊しく

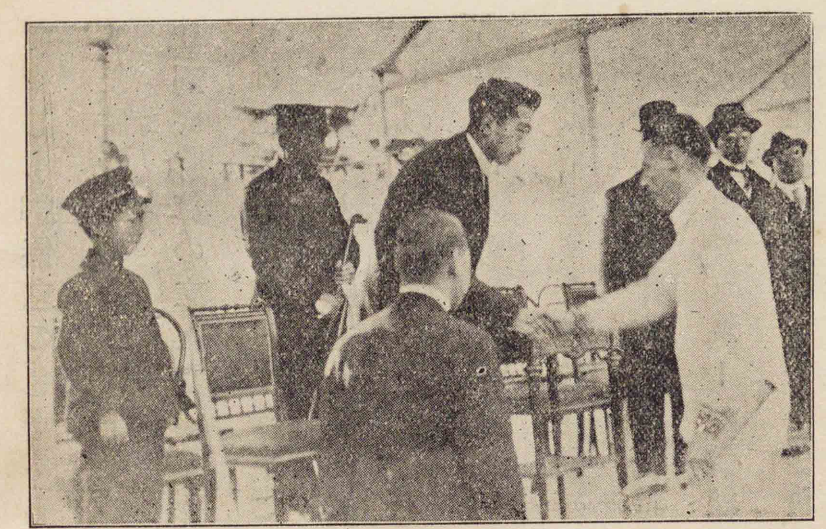
スポーツマンシップ　Sportsman ship　競技道
ゴルフ　Golf　球打ち
ウインタースポーツ　Winter-sports　冬季競技
スキー　Skee　雪滑り

感佩し奉るところであるが、殿下はなほスポーツマンシップといふことに對しても、十分なる御理會を有していらせられると拜察する。而して、殿下が平生種々の競技運動に對して深く御心を留めていらせられることは、如何ばかり「吾等の殿下」に對する欽仰の度を增さしめることであらう。洩れ承るところによると、殿下には先に御學問所で我が國固有の劍道を御修業遊ばされたとのことであるが、近來、乘馬やゴルフに御趣味を有せられ、更に最近ではウィンタースポーツの王と稱せられるスキーに對して御興味を有せられてゐる。先年御外遊の御歸途などには、印度洋の上で、しかも暑熱の盛りに、水兵の用ひる土俵の上で、お附の人々

テニス 庭球 Tennis
ボートレース 競漕 Boat-race

を相手に勇敢に角力を遊ばされ、二三度づつ立てつゞけに相撲はれても、些か御疲勞の御氣色さへ現されなかつたといふことである。このやうな御元氣を有せられるのも、日頃體育といふことを疎略に遊ばされない爲であらうと、有難く拜察するのである。

水泳も、御歸朝の後、一層御熱心に御練習遊ばされ、特に深い御趣味を有したまふやに拜聞する。そのほかテニスに御趣味を有せられることは、清水選手の御前試合を御覽ぜられたことによつても明かである。殿下が御多忙の御身を以て、或は專門學校のボートレースを御覽あらせられ、或は青年團の競技會に行啓あらせられる等のことは、殿下御自



攝政宮殿下キンゼー兄弟に握手を給ふ

身の御趣味よりせられるだけでなく、御思を深く國民體育の向上に致されるからであらうと拜察し、誠に感激に堪へない次第である。

次に運動家としての殿下の御態度について、吾々國民の特に感佩し奉るべきことは殿下が何れの運動に對しても非常に御熱心

スポーツマン精神　Sportsman　競技者

で、少しも御倦怠の色があらせられないと申すことである。また、試合の場合に、殿下のいらせられる組(チーム)が形勢不利となり、到底勝算の立たないやうな場合にも、そのまゝ見切りをつけて中止されるやうなことは決してなさらないで、最後まで堂々と奮闘をお續けになると申すことである。　殿下のこの御態度は、畏多くも正に、眞正なるスポーツマン精神の表現であらねばならぬ。

殿下はなほまた競技運動に對して非常に研究的な態度を持たせられ、先年富士の裾野に行啓あらせられて海拔二千餘尺の馬返でスキーの御練習をなされた時も、初の間は徹底的に基本の練習をなされ、先づそれが完成するまでは決

久米正雄　文學者　明治二十四年長野縣生

の練習にお移りにならなかつたさうである。　とかく基本練習をおろそかにして、早く競技をやりたがることは我が國運動家の通弊であるが、彼等は殿下のこの御態度に鑒みる**がよいであらう。**

要するに、我が攝政宮殿下は世界稀に見る諸道に通じてのスポーツマンでいらせられる。　體育運動の高唱される今日、かくも御立派なスポーツマンでいらせられる殿下を戴いてゐることは、我が國將來のために大いに祝福しなければならない。（體育の諸問題）

七　競漕

久米正雄

大學　東京帝國大學
コース　Course　航路
文農　文科と農科
ユニフォーム　Uniform　制服

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。大學の事務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それが晴れがましく見えた。

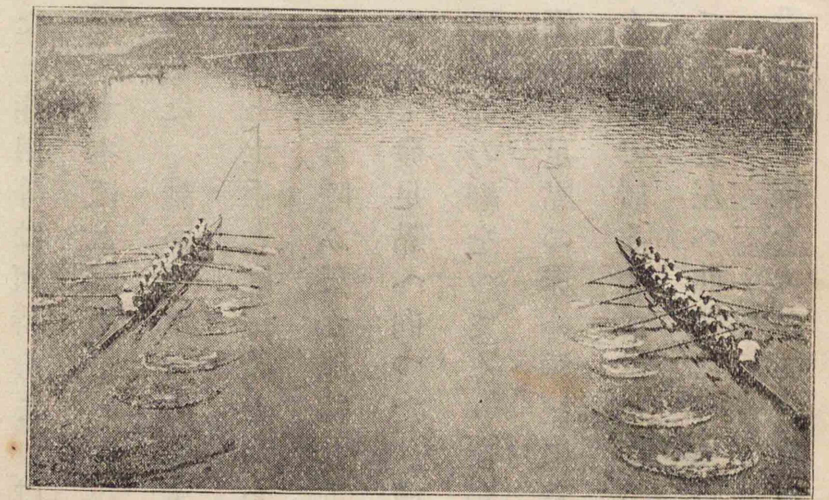
午後になると晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはた〳〵と鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。しかし、愈〻文農の競漕が始らうとする頃になつたら、珍しい夕凪が來た。

選手は皆樺色のユニフォームを着た。それが久野には何だか身が緊つたやうに感じた。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇との念を以て、この樺色の服を着た選手たちに道をあけた。文科の短艇が先づ拍手に送られて臺船を離れた。窪田等は何時もよりは緩かな調子で漕出した。そして三十本ほど試漕をした。やがて審判艇の差出す綱に繋留した。續いて農科の艇も繋がれた。

艇庫と土手と應援船とから「文科あ！農科あ！樺あ！紫い！」などと呼ぶ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向つた。漕手は皆艇の中へ寢てゐた。久野は舵の綱をつまぐりながら應援の聲を聞いてゐた。

艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凪いで居るのではなかつた。絶えず北東から吹いて來て艇首を左へ曲げた。久野はそれを直すために幾度も二番に輕く櫂を入れさせなければならなかつた。艇首を曲

淺草岸　向島堤の對岸　隅田川の右岸



競漕一高對三高のスタート

げて出發しては、只さへ淺草岸へ向きたがる艇の癖を一層激しくするやうなものだ。若し水路を外れて淺瀬を漕いだら、艇脚のとまるのは明かである。岸の審判所では「文科の艇が出過ぎたから權を入れるな。」と叫ぶ。久野は氣が氣でなかつた。そのうちに用意の令が下つた。艇首は又一瞬間の强風に曲げ

シート　Seat　席

られた。「えゝまゝよ、もうなるやうになれ。」と久野は目を瞑つた。と同時に號砲が響き渡つた。久野は用意と號砲の間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく永いやうに思つた。二つの艇の櫂は同時に水に這入つた。

久野の眼には敵の艇と自分の艇との前方に白く光つて居る水路の外、何もなかつた。久野の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない。皆慌てたな。」と窪田と久野は同時に思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方よりも出てゐるらしい。「ゆつくり！」と窪田が叫んだ。久野は更に大きな聲でも一度その言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひだした。この時競漕中に敵艇を野

スプラッシュ Splash 水をはねとばすこと

次るので有名であつた農科の舵手が「敵艇を拔くこと約半艇身！」と叫んだ。久野は言はせもあへず「噓だぞ。」とどなつた。今までだまつてゐた久野は、一度その言葉を言つて了ふと、急に口の緊りが解けるやうな氣がして、恐しく雄辯になつた。その中に農科の三番が大きなスプラッシュをした。水煙が鮮かにぱつと騰つた。久野は機を得たと言はんばかりに「やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。味方一同これに元氣づいた。敵の艇は久野に野次られて却て沈默して了つた。やつと二つの艇は並んだ。そして水門前で文科は約半艇身先んじてゐた。農科の舵手はそれでも「向ふはもうへたばつたぞ！」などと言つた。久野も「なあに、此方が出てゐるぞ。」と野次り返した。併し心持には少しもそんな言葉戰をしさうな餘裕がなかつた。

水門に來かゝると、久野は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。如何なる舵手でも言ふに定まつてゐる場所の指示を、機先を制して叫ぶのも一つの戰術であつた。早く言つた艇が晩く言つた艇より先にその場所にとゞいた譯だから。遲ればせに、農科は水門で特別の力漕を十本やつた。それで兩艇はまた並んだ。後ろから追ひかけられると、何だかずつと追拔かれたやうな氣がするものだ。久野の艇は何だか何時もより艇脚が遲いやうであつたが、暫くすると、又文科の艇がじりじりと拔出した。久野は「この調子で。」と叫

ピッチ Pitch

ラスト、ヘヴイ Last-heavy

んだ。農科の艇は沈默してゐた。そして渡場での力漕十本はもう此方に對して何の効力もなかつた。窪田は半眼でその敵の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身くらゐの差では、敵のラスト、ヘヴイが利けば何の役にも立たない。久野は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ」などと激勵した。この「あと一分」といふ、練習中に用ひ慣れた言葉が何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのだ。

皆が疲れて來た。すると不思議に艇がよく出だした。文科の艇は、疲れて來ると各個人の癖が取れて、全體としての調子がよく揃ふ。協力が此の時始めて完全に出來た。そして窪田の櫂につれて、各は機械的に身體を前後に動かした。

農科のラストも實によく出た。しかしそれを見て久野が氣遣つて居る間に、文科の方のヘヴイも非常によく利いた。多年の老練で、窪田のピッチがぐん／＼上つた。「もう十本!」。決勝線に入るまでは隨分永く感じられた。久野はひよつとすると、もう決勝線へ這入つてゐるのに、審判の號砲が發火しないのではないかと思つた。その刹那、號砲は轟いた。皆は漕ぎやめて艇内にどつと身を伏せた。この時

久野は嵐のやうな喝采が水上に響き渡つて居るのを初めて聞いた。それは決勝點に近づく時から鳴りやまなかつたのであるが、彼の耳には這入らなかつたのだ。

「どつちが勝つたんだ。」と二番の早川が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心したまへ、僕等だ。」と久野は答へた。併し久野自身も勝利を確信して居るのではなかつた。そして審判所に揭げられた樺色の旗を見るまでは安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戰であつたが爲に、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をまで熱狂せしめたのである。

「窪田君、艇を岸へつけようか。」と久野は言つた。

「待ち給へ。もつとゆつくりでいゝよ。こんな事は滅多に無いんだから、ゆつくり勝利の心持を味はうぢやないか。」と窪田は答へた。そして艇は猶も喝采の渦巻の中で靜かに水に漂はされてゐた。

その時久野はふと農科の艇を見た。それは今岸に着けられた處であつた。そして野次が敗れた選手を艇内から扶け起して岸へ上せてゐた。三番の大きな男が二人の野次の肩に凭れかゝつて、涙をかくしながら運び去られた。彼等はわざとしてゐるのか、眞に動き得なかつたのか、兎に角一人では立てぬ迄に疲れ果てゝゐた。

たつた半艇身の差が何といふ感情の相違を造つた事であらう。時間にすれば二分の一秒を出ない間である。空間にすれば二間と出ない處である。而して全體の水路から見て眞に何百分の一に足らぬ間である。この少しばかりの、しかも効果の恐しく大きな差は、そも何處から出たのであらう。一本の櫂毎に一寸づつ差が出來るといふ豫定が主將の窪田にあつたであらうか。毎日の練習の何分間かの優越が此の差を作つたと、久野自身も信ずる事が出來るであらうか。もし此方の選手の誰かゞ一本の櫂を流したらどうだらう。忽ち勝敗の數は顚倒するかも知れない。久野がちよつと舵を入れ損つたらどうだらう、忽ち艇は追拔かたかれも知れない。眞に危い勝敗であつた。「それは兎も角、勝つたには違ひないんだ」と、久野は置去られた敵の艇をなほも見ながら考へた。

その間に應援船が四方から漕寄せた。選手はやつと蘇つたやうに勝利を感じ出した。

勝利といふもの丶齎す感情は、凡べてのそれの中で最も妙な複雜なものである。と久野は思つた。夕日が今戰のあつた水路を掠めてゐた。久野は再び岸にゐる觀衆及び近くに漕寄せた應援の人々の顏を珍しげに見廻した。

（學生時代）

長谷川二葉亭
名は辰之助
文學者
新聞記者
舊尾州藩士
明治四十二年歿
年四十八

八 ポチ

長谷川二葉亭

ポチは朝起きだ。僕の起きる時分にはもう疾うに朝飯も濟んで、ひとつきり遊んだ所だ。が、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一目散に飛んでくる。

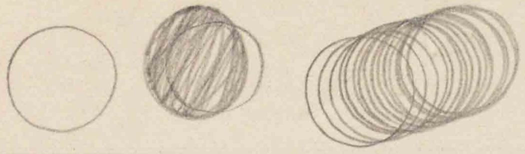
僕が急いで庭へ降りる所をポチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立てゝ、嬉しさうに面を見上げる、見下す。目と目とぴたりと合ふ。たまらなくなつて僕が横抱きに抱く。ポチは抱かれながら身を藻掻いて大暴れに暴れ、僕の手を舐め胸を舐め、頤を舐め、頬を舐め、舐めても〳〵舐め足らないで、惡くすると口まで舐める。父が面をしかめて汚い〳〵と云ふ。なるほど考へて見れば汚いやうではあるけれども、しかし僕は嬉しい、止められない。

これが濟むと、ポチもやつと氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろ〳〵しだして、縁の下などを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。好い物を見附けたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して來て首を一つ掉ると、草履は横飛びにぽんと飛ぶ。透かさず追つかけて行つて、又くはへてぽんとはふる。そんなたわいもない事をして活潑に元氣よく遊ぶ。

其の隙に僕は面を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で一番僕の苦

痛な時だ。ポチが跡を追ふ。うつかり出ようものなら何處迄も何處迄もついて來て、遂つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つて居て、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つて居る。仕方がないから、しまひには取つつかまへて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにして居たが、さうすると、前足で格子を引掻いて悲しい〳〵、血を吐きさうな啼聲を立てゝ跡を慕ふ。姿が見えなくなつても啼きやまない。僕もそれは同

長谷川二葉亭



じ思だ。泣きだしさうな面をしてばた〳〵と駈出し、聲の聞えない處まで來て、漸くほつとしてなみの歩調になる、そしていつも心の中でくりかへし〳〵こんな事を思ふ。

「僕が居ないと淋しいもんだから、それであんなに跡を追ふんだ、かはいさうだなあ。僕あ學校なんぞへ行きたくは無いんだけれど……行かないと阿父さんがポチを棄てて了ふつて言ふもんだから、それでしやうがないから行くんだけれども……」

じやん〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かだつた校舍内が俄かに騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後してあわたゞしくばつ〳〵と開く。と、その狹い口から、眞黑な

塊がどつと廊下へ吐きだされ、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝ちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口々に何だかわめく。只もう校舍をゆすつて、わあといふ聲の中に、無數の圓い顔が默つて大きな口をあいて躍つて居るやうで、何をわめいて居るのか分らない。で、それで一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごた〳〵と入りみだれ重なり合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜焼の足を蹈んだりして、上を下へとこね返した揚句にわつと門外へ押出して、東西へちりぢりになる。仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をぽんと抛り上げてはちよいと受けて行くいたづら

ものがある。其の隣は往來の石ころを蹴飛ばし〳〵行く。誰だか「あとで遊びに行くよ。」とわめく。「蝗を取りに行かないか。」といふ聲もする。友達が皆道草を喰つて居る中を、僕一人は駈抜けるやうにして、脇見もせずに、せつせと歸つて來る。

家の横町の角まで來て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつと其の方角の方を見る。果してポチが門前へ迎へに出て居る。僕を見附けるや、逸散に飛んで來て飛付く、舐める。何だか「兄さん」と言はれたやうな氣がする。若し本包と辨當箱と草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、僕は此の時ポチを捉まへて、どうしたか分らないが、それが有るば

かりに、どうする事も出來ない。據なく頭を撫でてやるだけで、不承々々また歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の面を看ておどけた眼色をする。追付くと、又逃げて又其の眼色をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包を其處に抛り出し、慌てゝ辨當をあけて、今日のお菜の殘りと稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分殘して來たのをポチにやる。それも足らないで、おやつにお煎を三枚貰つたのをせびつて、五枚にして貰つて、それから庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつとおさらひをおしと

云ふ。おさらひは厭だけれども、これをしないと、すぐポチを棄てると言はれるのが辛いので、澁々内へ入つて形の如く本を取出し、少しばかりおんによごによごとやる。それでおしまひだ。「餘り早いね。」と母がいふのを、空耳潰して、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い。」と呼びながら近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けないのであつた。（平凡）

柳澤健
法學者
詩人
外務省飜譯官
明治二十二年福島縣若松市生

九 さあ一雄君

柳澤健

さあ、一雄君出かけよう。

ステッキ Stick

空は晴れた。富士も見える。箱根も見える。
ジョンはさつきから尻尾を振りつゞけだ。
それに、あの小鳥の啼く音が森の中で……
太陽の光が、まるで細かい金粉のやうに踊つてゐる。
ごらん、僕の手までがその黄金でまみれてゐる。
行かう、一雄君。早く野に出よう。
ジョンはさつきから尻尾の振りつゞけだ。

何といふいゝ天氣だらう。
僕の帽子も、服も、ステッキも、この水筒までも
御機嫌のいゝ太陽に撫でられてぽか／＼してゐる。

アメリカ America
フランス France

あゝ溫かい太陽――おや、ジョン、お前の毛までが溫かい。
港の方からは、あれ、大きな汽笛の音が聞える。
アメリカ行の汽船か、それともフランス行か。
こんないゝ天氣には、
ねえ、一雄君何處までゝも行きたいやね。

早く行かう、一雄君。
銅鑼を鳴らせば汽船も出るのだ。
僕はさつきから銅鑼を鳴らしつゞけたんだ。
それに、ジョンもさつきから尻尾を振りつゞけたんだ。

街を離れる、野が擴がる、山が近づく。
畑には青い野菜、小川には綺麗な魚。
早く行かう、一雄君。
ジョンもさつきから尻尾を振りつゞけだ。

日は輝き、小鳥は歌ひ、微風は笑つてゐる。
さあ行かう、一雄君。
畑も、小川も、森も、丘もが、あれ、あのやうに手招してゐる。
さあ、行かう、一雄君。

春が來た、春が來た。

空も綠、野原も綠、小川も綠。
綠のなかにかゞやく黄金は、
たんぽゝ、菜の花、それから私のかはいゝジョンだ。

（柳澤健詩集）

一〇　芝生

吉村冬彦

私は自分の住家の庭としては寧ろ何もない廣い芝生を愛する。樹木も勿論好きである、美しい草花以上にあらゆる樹木を愛する。若し數千坪の庭園を所有する事が出來るならば、廣い芝生の一方には、思ひ切つて必ずさまざまな樹

吉村冬彦　本名寺田寅彦　物理學者　理學博士　東京帝國大學教授　明治十一年高知縣生

木を植ゑるだらうと思ふ。そして生氣に乏しい、所謂「庭樹」と稱する種類のものよりも、寧ろ自然な山野の雜木林を選みたい。

併しそのやうなことが許されないとすれば、樹木の方は割愛しても、芝生だけは作らないでは居られない。

許されるかぎりの日光を吸收して、芝は氣持よく生長する。無心な子供に蹈荒されても、嚴しい氷點下の寒さに曝されても、此の粘り強い生命の根はしつかりと互にからみ合つて、母なる土の胸にしがみ付いて居る。さうして父なる太陽が赤道を北に越えて回歸線への旅を急ぐ頃になると、其の歸りを豫想する喜に堪へないやうに浮き立つて新しい

綠の芽をふき始める。

梅雨期が來ると一雨毎に綠の毛氈が濃密になるのが、不注意なもの丶眼にも際立つて見える。靜かな雨が音もなく芝生に落ちて吸込まれて居るのを見て居ると、本當に天界の甘露を含んだ一滴々々を、數限りもない若芽が、其の葉脈の一つ〳〵を歡喜に波打たせながら、呼吸もつかずに呑みほして居るやうな氣がする。

雨に、曇に、午前に、午後に、芝生の色はさま〴〵な變化を見せる。或時は强烈な日光を斜に受けて針のやうな葉が金色に輝いて居る。その上を掠めて時々何かしら小さな羽蟲が銀色の光を放つて流星のやうに飛んで行く。

それよりも美しいのは、夏の夜が更けて家內も寢靜まつた頃、讀み疲れた書物を閉ぢて緣側へ出ると、机の上に吊した電燈の光は明放された雨戶の隙間を越えて芝生一面に注がれて居る。眞暗な闇の中に擴げられた天鵞絨が、不思議な綠色の螢火を放つて居るやうに見える。或時はそれが又底の知れぬ深い淵のやうに思はれる事もある。これを見て居ると、疲れ熱した頭の中がすうつと涼しく爽かに和らいで來る。私は時々庭へ下りて行つて、色々の方向から此の闇の中に浮上つた光の織物をすかして見たりする。それから其の眞中に椅子を持出して空の星を點檢したり、深い沈默の小半時間を過すこともある。

芝の若芽が延び始めると同時に、此の密生した葉の林の中から數限りもない小さな生き動くものゝ世界が產れる。夏の終りから秋へかけて、そこらに產みつけてあつた微細な卵の內部では、吾々の夢にも知らない間に、世界で一番不思議な奇蹟が行はれて居るのである。其の證據には、試に芝生に足を入れると、そこからは小さな土色のばつたや蛾の樣なものが群がつて飛出る。蟋蟀や蜘蛛や蟻や其の他名も知らない昆蟲の繁華な都が、蟲の眼から見ると天を摩するやうな綠色の尖塔の林の下に發展して居る。

子供等はよく此等の小さな蟲をつかまへて、白粉の空罐へ入れたりする。何の爲にそんな事をして小さな生物を苦

しめるかといふやうな事は少しも考へては居ない。それでも蟲の食物か何かの積りで、むしり取つた芝の葉を罎の中へ詰めこんで、それで蟲は十分滿足して居るものと思つて居るらしい。其の儘忘れて打つちやつて置いた罎の底にひつくり返つて死んで居る骸を見付ける時は、やはりいくらかかはいさうだとは思ふらしい。それで垣根の隅や樹の下へ「蟲のお墓」を築いて花を供へたりする。

子供等は又よく蚊帳吊草を芝の中から搜し出しては、三角な莖を割いて方形の枠形を作り、相撲取草を見付けては相撲を取らせて居る。

芝の中から蒲公英や酢漿草（かたばみ）や其の他の色々の雜草も生え

土岐善麿　號は哀果　文學者　東京朝日新聞記者　明治十八年東京生

て來る。私はなんだかそれを引拔いてしまふのが惜しいやうな氣がするのでその儘にして置く。

夏が進むにつれて、芝は益々延びて行く。（冬彥集）

二　生きた額面

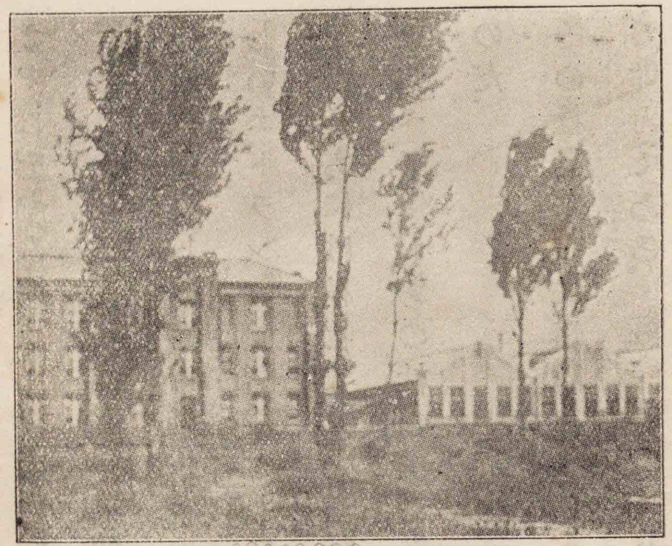
土岐善麿

東と南と北と、窓を通して三方が三方、それぞれに風景と情趣の違ふことが、樂みの一つである。東の方は空地になつてゐる。この空地は約千坪ある。窓から傾斜の木下路を隔てゝ、今は青々と雜草が延び放題に延びてゐる。雜草といつても、よくみると芒がある。そのすく／＼と率直な、單純な青葉の靡きは快い。またよく見ると、萩も幾株かある。

ポプラ Poplar 白楊

まる／＼と上品な嫩葉の乳色を帶びた葉裏は、いかにもゆかしい。その一面の雜草を圍んで、雜木が立つてゐる。そのなかにも、無造作に高くなつたポプラが枝といふ枝を擧げて、蒼空に讃美の祈をしてゐるやうな姿は、何等の虚飾もなくて、叫ぶならば一緒に叫びたい氣がする。この草地に注ぐ朝の雨は、別してよろしい。それが間もなく、思ひ切りよく霽れて、しつとり濡れた太陽が、眞正面に、しづ／＼と昇つてくる。——もうその時は、「昇つてくる」といふよりは、相應に高く昇つてゐるのだ。丁度あのポプラの枝の左肩ぐらゐのところに。——しばらくは動かない、たゞくる／＼と露を振落すやうに烈しく廻る。

蟬がなきはじめる。蛙の聲は耳について、つい忘れてゐるのだ。氣がつくと、隨分さかんに水田の方で鳴いてゐる。水田の方は南になつてゐる。そこは一帶が林業試驗場の杜で、亭々と形容すべき老松を背景に、雜多な若葉青葉が重なり重なつてゐる。しかし、どれも名を知らない。植物の名を知らないには我ながらあきれる。葱の芽の細いの



ポプラ

エトランゼ Etranger 親しみのない者 外國人

に驚いたり、豆をくはへたやうな苗の並んでゐるのを見て、こやしをやる爺さんに聞いて、始めてそれがなたまめとおぼえるやうな有様だから、専門的に植ゑつけられた試驗場の造林が、久しい都市居住者の僕等にとつて、今はまだ懐かしいエトランゼであることを深く咎めずにくれたまへ。そのうちには植物大系とか、植物圖譜とかいふやうなものを抱へて、僕もあの杜の中を散歩して見ようと思つてゐるのだ。

その杜と垂直に、垣沿ひの樫が數十本、高々と水田のふちまで並んでゐる。

北の窓ぎはからは青麥の丘が續いて、そのさきの競馬場を

スケッチ Sketch 寫生圖

限る楢林の、若芽の頃の乳白色のやはらかさは、これから生延びる幾年、春を待つ心をどんなにつゝましく誘ふことだらうか。

燒いてしまつた幾枚かの油畫の額。——いまは最近に唯一枚友から贈られた「四月」といふ郊外のスケッチをかけたばかりだが、その三方の窓から見透す外光の風景は、丁度額縁をはめたやうに、毎日すてきな構圖をみせてくれる。そして窓へ近よれば近よつたやうに、窓から離れゝば離れたやうに、椅子を右へ、また左へ、いざればいざつただけ、不斷に無限の變化を見せてくれる。家財一切を失つた僕にとつて、「窓」は今「生きた額面」なのだ。

「わたしがあすこへいよ〳〵建てると、すこしあなたの額面の邪魔になりますね。」

僕の庭さきの林業試験場の杜の方の空地へ近く新しい住宅を建てることになつてゐる隣の友は、かう言つた。

「なあに、ちつとも構ひませんよ。この大きな自然の中に、お互の小さな家なんか、あまり問題になりませんもの。」

僕は笑つて窓際に立つた。

「なるべく小さく、右寄りに建てます。そしてあなたの油畫の構圖を妨げるやうな設計は成るべく避けますから。」

こんな謙遜さで、僕等は毎日隣同士、顔をあはせる。（朝の散歩）

徳川義親　舊尾州藩主　侯爵　貴族院議員　明治十九年生
ユーラップ　北海道渡島の河流
遊樂部
アイヌ　Ainu人　北海道の舊土人
トヨマス　アイヌ土人の一人
やす　長い竿のさきに銛をつけたもの　魚を刺して捕へるに用ひる

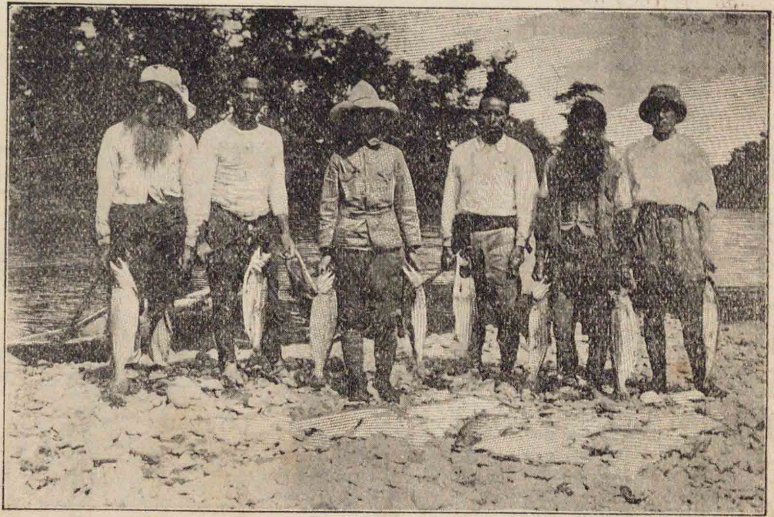
一三　川狩

徳川義親

ユーラップの急流を獨木舟に乘つて上る。アイヌが髯を風に靡かせて漕上る。太古の趣がある。

「そらつ。」とトヨマスがいつた。「突いてしまへつ。」と叫んだものがある。最も腕利きのトヨは忽ち追ひはじめた。三十間、四十間、力をこめて追上る。早い瀬に來たと思ふと、やすを取直してばつと投げた。がばと水がはねたと思ふと、二尺餘もある鱒のえらの下を見事に突いてゐる。トヨはなほ追つて、また一尾突いた。鱒を捜しながら二里も遡り、川幅がせばまり、獨木舟さへ通ふのに困難な處まで行つて、それからよどみで網をかけては次第に下るのである。

宮様　北白川宮永久王殿下並に竹田宮恒德王殿下



北白川宮　竹田宮　德川侯

アイヌが獨木舟で網をまくと、宮様もアイヌも一緒になつて網を引く。網は小さいが、騒ぎはなか／＼大きい。そら、下が敗けた、宮様引張つて下さい。足がういた、逃すな。ゐたつ、ゐたつ。えんさえんさ。さながら氣狂ひの様だ。網を上げると、二尺位の鱒が五本、ばしや／＼とあばれてゐる。宮様、頭をぶん

なぐつて殺して下さい。そら逃げさうだつ。忙しくなつて來ると、言葉も何も至極ぞんざいになる。

鍋と味噌と米とを用意して行つたので、河べりで焚火をして、飯を炊ぎ、鱒汁を作つた。獨木舟の底を返して俎板とし、小刀を拔いてぶつ／＼切りにし、鍋に入れて河水を汲込む。柳の枝を削つて串にし、鱒を刺して燒き、いたどりの葉を皿にして載せる。出來上つた汁を見ると、味噌が摺つてないから、鱒に豆が一ぱいついてゐる。神經質のものなら御免蒙りさうな汁である。

それでもお腹がすいてゐるから、宮様もよく召上る。宮様も、我々も、アイヌも、一つ鍋の汁を啜るのである。かうして

七時頃まで骨折つたが、十八本しか獲れなかつた。これは畢竟天候にたゝられた結果だ。

最後の場所まで來ると、堤の上で、途方もない大きな聲でおおいと呼んでゐる人がある。よくまあ、あんな大きな聲が出るものだと思つたら、それもそのはず、約束の快男兒が今到着して停車場から馬を飛ばして來たところだといふ。お蔭で賑かになつたのはよかつたが、話に花が咲いて、たうとう十二時近くになつた。眠いのなんのつて。（報知新聞）

一三　螢の王國

高濱虛子

音もない靜かな〱眞菰の中の闇に坐つたやうな心持で、私は四角な小さい船室の窓に顋をもたせて、移り行く外面の光景を朧げながら眺めてゐた。さつきから螢が屢、眼界に現れては消える。岸の眞菰に這上つては、つるりと水の上に滑り落ちるのもある。目前の闇を、柔かな大きな曲線を描いて鷹揚に飛ぶのもある。舟は私の顏を向けて居る方の岸に、非常に近づくこともある、又其の岸からやゝ遠ざかることもある。斯くして佐原行の水道の闇を私の乘つてゐる舟一つが占領してゐたのも大分長い間のことであつたが、ふと私の船の機械の音の外に別の機械の音が聞え始めたと思つたら、それは私の乘つてゐるやうな外輪の汽船が佐原の方から反對に此方へ航行して來たのであつた。

佐原　千葉縣香取郡佐原町
此方　茨城縣行方郡潮來町

ランプ Lamp

此の狹い水道に二つの船がうまく擦れちがひ得るものかと一寸怪しまれたが、それは少しの心配もなく互に岸の方に寄合つて、流れるごとく擦れちがふことが出來た。其の時は、私の顎をもたしてゐる船の窓は殆ど岸の眞菰に接するばかりであつた。といふよりは、或時は殆ど眞菰の上を乘越したといつてもよい位であつた。なほ其の時私の眼に留つたのは、此の擦れちがつた船の赤い舷側のランプの色であつた。私の船にも同じやうなランプが灯つてゐたのではあらうが、船窓に顎をもたせてゐる私の眼には少しも其の光は這入らなかつた。そこには只眞菰の闇と、何の明りともつかないやうな水面の明りと、其の眞菰の闇や水

明りの上に點綴さるゝ螢の外は何物もなかつた。その折柄、突如として向ふから來る船の舷側の赤い灯が見えたので、格段に物珍しく眺められた。が其の船も擦れちがふが早いか、直ちに此の靜かな世界から消去つてしまつて、あとは前よりも一層物淋しい柔かい闇となつてしまつた。

其の時であつた、ふと私の眼の前に特異な一つの世界が現れて來たのは。それは螢の世界であつた。私の船は此の佐原行の水道に這入つてから、螢の光には既に屢、接してゐるので、少々の螢が眞菰に光つたり、水の上を飛んだりするのは何の珍しい景色でもなかつたが、此の時私の眼の前に現れた螢の世界といふのは、そんな普通なものではなかつ

た。それは正しく一本の柳の木が水の上に長い枝を垂れて居るところであつたが、その柳の水に接して居る處に、何萬疋何十萬疋とも數知れぬ螢が、萩に置いた露よりも繁く美しい光を放つてゐたことであつた。

私の殊に驚いたのは、其の螢の世界が如何にも力に滿ちた動的な世界であつたことで、其の何萬疋といひ、何十萬疋といふ螢は、一疋として靜止してゐるものはなく、其の光は悉く動きつゝあつた。柳の枝を這上るのもあれば、這下るのもある。小さく飛ぶものもあれば、大きく飛ぶものもある。恰も蚊柱が餅を搗いてゐるやうに、それらの螢は悉く柳の枝を中心にして嬉遊してゐる。それがまた中心ほど動き

が小さくて、外部になる程動きが大きく、一番外面にある螢の如きは數間の高さに飛上り、飛下り、縱横無盡に闇を縫うて駈けるのであつた。又其の柳の枝は横に廣いよりも奧に深く、其の光の中心は其の深い〳〵奧の處に存在してゐて、そこに此の螢の王國の宮殿があるやうに思はれた。

其の上、又其の柳の下はすぐ鏡の樣な靜かな水になつてゐるので、其の飛花紛々たる螢の世界はその儘を水に映して、そこには二重に光の世界が描き出されるのであつた。そこで大空に數間高く飛ぶ螢は、又水中に數間低く飛ぶことになり、水に接して露をこぼしたやうに散る螢は、又水の中から反對に水面目がけて同じやうな光を浮び上せて來る

やうになるので、其の光景は一層見事なものとして人の眼に映るのであつた。さうしてこれに似寄つた光景は船の進むに從つて幾度となく私の眼の前に現れて來た。私はやはり船室に顎を載せたまゝでそれを眺めたのであつたが、併し心は驚喜して、夢中に覺える心の興奮のやうな一種の興奮狀態にあつた。日が暮れてから水を吹きかけて貰つた籠の螢も、やはり同じやうに喜び、飛び、光るのであるが併し其の數を何千萬倍し、而も其の天地は自然其の儘の自由な柔かい此の水鄕の一部に置かれ、盡くるなき水、盡くるなき闇、盡くるなき力の中に喜び飛び光るところの螢の王國は、此の時始めて私の眼に映じ出されたのであつた。

土井晩翠　名は林吉　英文學者　詩人　第二高等學校教授　明治四年宮城縣仙臺市生

しかし其の光景も長くは續かなかつた。それは僅かに十數間の間に限られた特別の天地に過ぎなかつた。私の船は、自分の機械の音の外に何の響もない水道の闇を何時までも單調に航行するのであつた。私の顎を載せた窓は又岸に近づいたり、離れたりした。二三疋、四五疋の螢は眞菰を這上つたり、這下つたり、水の上を横樣に、大空を縱樣に飛んだりしたが、併しながら唯それだけのことであつた。

（朝の庭）

一四　夏の夜

土井晩翠

はや黃昏の影寄せぬ。

風おもむろに吹通ふ
都大路の夏げしき。
洗ひすてたる夕立の
名殘柳に玉とめて。

大空高く月出でて、
八百の街の限もなく
照す涼しき夏の夜や、
雲は靜かに收りて、
殘る稀なる星の影。

そゞろあるきに夜更けて、
袂は重し、露深し。
月斜なる時計臺
二つの針の重なりて
打つも高しや、時の數。

傾きかゝる天の河
仰ぎて家路さして行く
逍遙の群あともなし。
ちまたのあるじ、今はたゞ
月の光と吹く風と。 (曉鐘)

北原白秋 名は隆吉 詩人 明治十八年福岡縣柳河町生

良寛禪師 越後出雲崎の僧 歌人 天保二年(二四九一)寂 年七十四

一五 童心

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好であつた。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きであり、又子供たちと遊ぶ事がどんなにうれしかつたかが思ひやられる。

その良寛様も子供たちには隨分馬鹿にされて、盛になぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず平氣で、一生懸命に遊び惚れてゐた良寛様が有難い。

＊

ある時、良寛様は例の通り、子供たちとかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ。」といふかはいゝ聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら〳〵點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて、一人殘らず、こそ〳〵と歸つて了つた。そこは子供だから良寛様も何もうつちやらかしてである。むろん、いくら待つても「いゝよ。」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けて了つた。良寛様はそれでもまだ一生懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處

に同じ姿をしたまゝ「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。

良寛禪師

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

*

それから、またある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふので、さつそく田圃の稲むらの中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠見たやうに頭からすつぽりと稲藁をかぶつておど〱してゐた。すると子供たちはまた例の通り一人のこらずこそ〱と歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも御存じがない。また日が暮れて、夜が來て、また夜が明けた。稲村には霜がまつしろに置き、朝の日がのぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稲たばをやにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。見れば、こはそもいかに、良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる。

「おや良寛様が。」と云ふと、慌てゝ、「靜かにしろ、靜かにしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。

＊

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏と云つた童のむかしその儘である。それは何ものにも代へがたい、二つとない尊い天稟である。

榮坊がまだ八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日、父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこで、また〳〵叩かれた。「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」これを聞いた良寛樣の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、或濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと、榮坊曰く、「俺まだ鰈にならねいか。」鰈になると云はれたので、ほんたうに鰈になると思つて、一心に海を視つめてふるへて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。人童を欺く大人こそ禍である。（洗心雜話）

森林太郎 號は鷗外 醫學者 文學者 醫學博士 文學博士 陸軍々醫總監 東京帝室博物館總長 舊石見國津和野藩士 大正十一年薨 年六十一

仲平 安井衡 字は仲平 號は息軒 日向飫肥藩士 幕末の大儒 明治九年歿 年七十八

一六 大儒息軒先生

森林太郎

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんは不男だ。」といふ蔭言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てゝ住んでゐる。財產としては

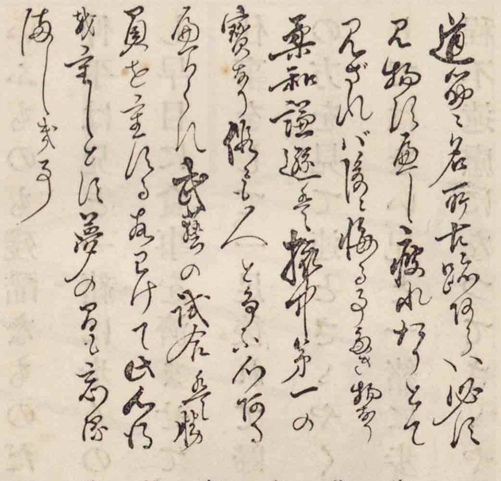
父
名は鞆宗
字は子全
號は滄洲
文化六年（二四六九）
歿
年六十餘

飫肥藩
日向國南那珂郡
藩主は伊東氏
采邑五萬七千石

宅地を少し離れたところに田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにゐたのである。併し仲平の父は三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、段々飫肥藩で任用されるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして外の人が烟草休をする間、二人は讀書に耽つた。

筆蹟
旅行中心得の條々
道筋に名所古跡あらは必す見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の寶なり假にも人と爭ふ心あるへからす武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るましき事
丑正月望前一日　半九齋



安井息軒筆蹟

父が始めて藩の教授を命ぜられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が皆言合せたやうに二人を見較べて、連があれば連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合に見えたからである。兄弟同時にわづらつた疱瘡が、兄は輕く、弟は重く、弟は大痘痕（あばた）になつて、剩

へ右の目が潰れた。父も小さいとき疱瘡して片目になつてゐるのに、又仲平が同じ片目になつたのを思へば、「偶然」といふものも殘酷なものだといふ外はない。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早目に食事を濟ませて、一足先に出て、晩は少し居殘つて仕事をして、一足後れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とさゝやくことは止まなかつた。それはばかりではない、兄と一緒に歩く時よりも行逢ふ人の態度が餘程不遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲をかけるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

篠崎小竹 名は弼 大阪の名儒 嘉永四年（二五一一）歿 年七十一

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

聖堂の講釋（教育博物館藏）

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

仲平に先だつて體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に著

古賀侗庵　名は煜　精里の第三子　昌平黌の儒官　弘化四年(二五〇七)歿　年六十

いて長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、これを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、「あれでは體が續くまい。」と氣遣ふほどであつた。中一年置いて二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、兎角病氣で、たうとう二十六歲で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

其の後仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平黌に入つた。後世の註疏に據らずに經義を究めようとする仲平の爲には、古賀より松崎慊堂の方が懷か

昌平黌　昌平坂御學問所　幕府の學校　本郷區湯島にあつた

松崎慊堂　名は復　肥後の儒者　弘化四年(二五〇七)歿　年七十四

しかつたが、昌平黌に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舍書生は、こゝでも同窓に馬鹿にされずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に默り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音をしのぶが岡の時鳥、いつか雲井のよそに名のらん。

と書いてあつた。

「やゝ、えらい抱負ぢやぞ。」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍、氣味惡くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學に全力

を傾注するまで國文をも少々研究した名殘で、わざと流儀違ひの和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。」

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にされた。そして翌年藩主が歸國される時、供をして歸つた。

江戸がへり、昌平黌仕込と聞いて、「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、背の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ。」と蔭言を言はずに置かなかつた。

大儒息軒先生としてその名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八の頃からである。（鷗外全集）

窪田空穗　名は通治　文學者　明治十年長野縣生

一七　日本アルプスの一夜

窪田空穗

人夫が來ると、私は、

「君、先へ立つてくれ。」と頼んだ。周圍を見過ぎた私は、この場合、さうしてもらふのを慰めだと感じるまでの心にされてゐた。

「全くこゝはひどいんです。」さう云つて人夫は先に立つた。そして振返り〳〵足を移して行つた。

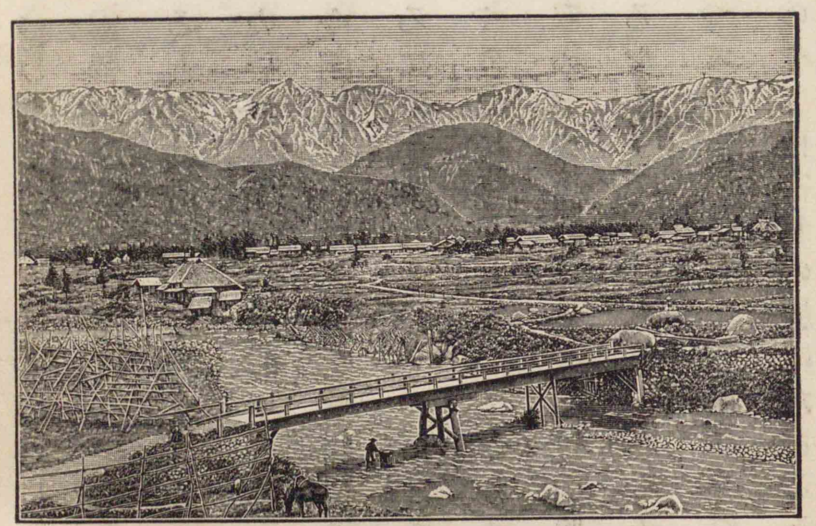
狹い尾根の上には、ところ〴〵に大きな岩が突立つてゐた。小さな岩でも道一ぱいになつて、よけるところのないものになつてゐた。私たちは岩に抱きついて、からだを移して行く外はなかつた。

「大丈夫ですか。」一つの大きな岩を越すと、人夫は立ちどまつて、後に續いた横山君をじつと見ながら云つた。横山君は無事に岩をめぐつた。私はその後に續いた。

岩に抱きついた私は、今、右足を進めると、左足を大きく、岩に觸れないやうにと加減して移した。それでも左足の股のところが岩に觸れた。ちよつと觸れたと自分では感じたか、そこに物の裂ける音がして、そして股に痛みを覺えた。岩を過ぎて見ると、私のズボンも、ズボン下も、刄物で切つたやうに裂けて、そして股はかなり長く切られて、紅く血が滲み出してゐた。

「手袋をはめて居なからうものなら、とても歩かれない。」と

テント Tent



日本アルプス

云つて、私は木綿の厚い手袋を見た。僅かのあひだ岩に縋つた爲に、その手袋は可なりに擦れてゐた。

頂上へ着くと、すぐ眼の下の、四方とも小高くなつた一つの窪地に、もうテントを張つて、焚火を始めてゐた。狹い場所に三つのテントと、三つの煙を立てながら燃えてゐる焚火とが、

藥師岳　越中中新川郡に峙つ山　標高三千メートル

さびしくも親しいものに見えた。

露營地に續いて西に土手の高さを持つてゐるところに登ると、私は前面に、雄大な、落ちついた、そして素朴の感を持つた、いはゞ巨人が胡座をかいて休んでゐるやうな山を見た。今朝、遠く一面を見た藥師岳である。　赤牛はもう黑岳の後ろに隱れてしまつて、今はそちらへ眼を放つて、一面を見るやうになつてしまつてゐた。

私の立つてゐるところは山腹ではあるが、傾斜は極めてゆるやかで、丸々として、ところ〴〵に高山植物の白い花を持つてゐた　そして谷は深くはないやうに見えた。　その谷の、やゝ南寄りの展けたところに、私は一つの奇妙な山を見おろした。　それは山とは云つても、小さな山を横斷して一劃の平地としたやうなものである。　自然にあるものとしては如何にも人工的な感を持つてゐて、第一印象としては奇妙と感ぜざるを得ないものである。　が、暫く見てゐると、それが何かの形に似てゐると思つた。　が、何であるかは思ひ得なかつた。　後になつて、それは「蜘蛛の平」といふのだと聞いて、さう云へばそんな形にも見えると思つた。

露營地の南の方は、極めてゆるやかな傾斜をもつて高まつて、遠く何處までも續いてゐるやうに見えた。　そちらには偃松が繁く生えてゐるのが見えた。

北の空には、峰つゞきに、一つの高い峰が聳えてゐた。　この

山の岩は茶褐色であるのに、そちらは黒いのが異様に感じられた。黒岳といつて、峰には水晶の小さいのが少なからずあると聞いた。

今まで見えなかつた同行の堀君は、焚火の側へあらはれて來た。靜かな微笑を浮べながら、

「黒岳へ行つて來ましたよ。」と云つて、上着のかくしから細かい水晶を摑み出して、手を擴げて見せた。つまらない水晶のやうに見えた。

「もつと大きいのはないんですか。」

「あるかも知れないが、岩をかく道具がないから分りません。」

「どつさりあるんですか。」

「えゝ。」と堀君は微笑してうなづいた。

居合せた小林君は、

「僕も行つて見て來よう。」と好奇心をそゝられたやうに云つた。そして私たちの顏を「どうです。」と誘ふやうに見た。

疲勞は私たちの好奇心を封じてしまつてゐた。私は默つてゐた。小林君の姿が見えなくなつた。

横山君は寫眞機を持出して、レンズを彼方此方に向けてゐた。

「藥師を背景に、一枚いゝのをとつてくれないか。」

「光線がどうか知ら。」横山君は胸にあてた小さな寫眞機

を覗き込みながらいつた。

こゝへ着いた時には、まだ日が可なり高くて、岩も草も光つてゐた。暮れるに遲い夏の日が、いつの間にか暮れかゝつて、眼をとめて見ると、光は空だけのものとなつてゐる。そしてその空も青ざめて、晝の盛りの光で見る時の活き〳〵した力を失つてしまつてゐた。

露營地へ着いて寢るまでの間は、即ちじつとして山に向つてゐられる間は、一日の中で一番山嶽氣分の濃くなる時である。危險な道を歩いてゐる時は、山は足の下に縮まつて來て、山と足の下とは一つものになつてゐる。仰いで見廻す山々は、皆偉力を示してはゐるが、此方の張切つた心には

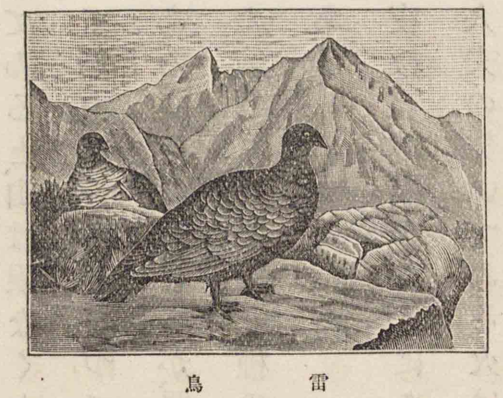
その偉力は恐しいものとはならずに、むしろ美しく耀かしい誘惑的なものに見えて來た。それがじつと動かずに見てゐると、山は限なく大きく、靜かに、その反對に自分は極めて無力なものとなつて來る。そこには寂しさに似た感がある。その寂しさが、單なる寂しさでなく、淸らかさを持つた寂しさなので、一種の快さとなつて受けいれられるのである。

夜は今、薄靄のやうにあたりに漂つて來た。テントの側で人夫の焚いてゐる火は、次第に赤い色を加へて來た。見ると、人夫は夕飯を食べる支度をしてゐる。

その時である、何處かへ遊びに行つてゐた關西の學生の一

行は、揃つて騒ぎながら、南の方の偃松帯の方から近づいて來た。

一番大きな青年が、手に何かを握つてゐる。外のものはそれを珍しがつて、覗いて見ようとする。大きな青年は手を差し上げて見せ惜しむやうにしてゐる。それが影繪のやうに見えながら、私たちの側まで來た。



雷鳥

「何です。」と私は大きな青年に訊いた。

「雷鳥の雛です。」

「いけませんよ。」と私は強く首を振つて、そのことの悪い意を示した。「叱られますよ。」

本當は、私は、叱られるかどうかを知らなかつた。すぐに感じたのは、何れはおもちやにして殺してしまふにきまつてゐる、それがかはいさうだと思つただけであつた。

「いけませんか。」と、その青年は關西訛りで慌てゝ訊いた。その眼には呆れた色が無邪氣な色と一緒になつて現れた。

「どうしたらいゝでせう。」

「どうつて、しかたがないな。放しておきなさいよ。」

青年は、何處へ放したらいゝだらうといつたやうに、まごまごして、手に握つてゐる雛を眺めた。

横山君は側から、
「そこいらに置けばいゝでせう。あの石の上がいゝ。かはいさうに。」
と云つた。青年は云はれた通りに、少し先の低い草の中に高く見える、一つの石の上に置いて來た。
焚火を圍んだ時には、案内者は一團の者の氣を兼ねながらも、しかし、しつかりした口調で、雷鳥を捕つてはならないこと、分らない積りでも何うかして分つて、案内者が迷惑することを話して聞かせた。
學生連中は默つて、困つた顔をしてゐた。
「あの雛はどうなるだらう、死にやしないか知ら。」

私は氣にして云つた。人夫の一人は、
「親鳥が捜しに來ますよ、鳴き聲で分るんです。」と云つた。
食事が濟んで、そろ／＼寝ようといふ時であつた。山はすつかり暗くなつてしまつて、空は青黒く高くなつた。赤く燃える生木（なまき）の焚火を圍んで、私たちは沈默がちになつてゐた。あたりには何の音もなかつた。
「ぴよ、ぴよ。」といふ聲が遠く微かに聞えた。その聲はみんなの耳に入つた。
「雷鳥の親が捜しに來た。」と一人がいつた。
みんなそちらに耳を集めた。
「ぴよ、ぴよ。」といふ聲は續いて起つて、そして闇の中をさま

よつてゐるのが聞える。近くなるかと聞くと、遠くなつて行つた。

「雛が返事をするといゝんだ。教へてやりやうもない。」私たちはさう云つて、親鳥をかはいさうにも思ひ、又雛の居場所の分らないのをもどかしがりもした。

「今に分るだらう。」とも云つたが、それは自分を慰めるに過ぎないといふ氣がした。

翌朝、眼が覺めて、テントから這ひ出すと、私たちは雛鳥を置いた石のところへ行つて見た。雛はゐなかつた。その邊を見廻したが、何處にもその姿は見えなかつた。寒い、寒いと、みんな肩を窄めた。

サック Sack 袋

河井醉茗 名は又平 詩人 明治七年大阪府堺市生

一八 山の歡喜

河井醉茗

（日本アルプス縱走記）

「水が氷つてゐた、昨日解けたのが、氷つてしまつた。」雪溪へ顔を洗ひに行つたものが、さう云つて歸つて來た。堀君はサックの中から寒暖計を出して見た。

「東京の酷寒ですね。」と云つた。

「今夜はもつと寒くなります。」と、案内者は得意なやうな顔をして云つた。

昨夜、大事にして焚き餘してあつた偃松の生木は、白い煙を立てゝ、黎明のさわやかな空氣のなかに燃え出して來た。

あらゆる山が喜んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみをして
舞ふ、躍る。
あちむく山と、
こちむく山と、
合つたり、
離れたり、
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなつたり、
高くなつたり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
遠くなり、
近くなり、
あらゆる山が
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や
山のかゞやきは
空いつぱいにひろがつてゐる。（明治大正詩選）

阿部次郎　哲學者　東北大學教授　文學博士　明治十六年山形縣生
一昨々年　大正七年
輕井澤　長野縣北佐久郡東長倉村の大字　淺間山の南麓　著者の避暑してゐた地

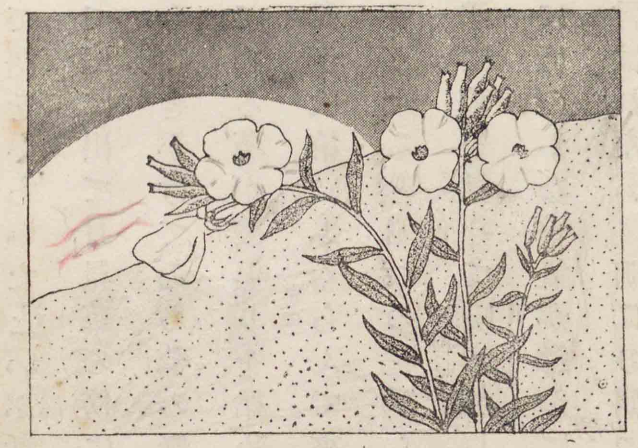
一九　月見草

阿部次郎

月見草は私の好きな花の一つである。とりはなして云へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすが〳〵しさとは、月見草のほのかな黄色を言ひ難くなつかしいものに思はせるのである。

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗いうちに狹苦しく滿員になつてゐる停車場の旅亭を出て、同宿のI君やM君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。

月見草が曉に近く幾らか萎れかかつて限もなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも言へず親しい氣持になつて又旅舍に歸つた。



月見草

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の烟草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが

見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音をきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしやがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる蕚が後退りを始める。蕚が開くと、卷かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて來て、遂に蘂を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持はなんとも言はれない。明日の朝になれば、凋んでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知

れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟は開けない。併し悟が開けなくとも、新しく咲く花を見まもる靜かな愛の心は、本當にありがたいものであつた。

（北郊雜記）

二〇　鳥飼藏人

五十嵐　力

奧州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或日諸國行脚の老僧が訪ねて來て、御主人に御目にかゝりたいと云つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたものでござる。

五十嵐力　文學者　文學博士　早稻田大學教授　明治七年山形縣米澤市生

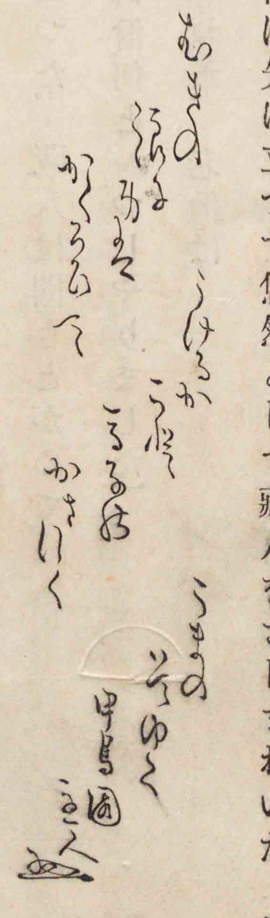
白河　福島縣西白河郡白河町

近頃不躾なる御願ながら、生涯の思出に貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが叶ひますまいか。」
と賴み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓場に立つた。藏人の顏には誇の色が見えた。
「では拙い藝を御覽下さい。」
と云つて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみ〳〵と水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に。二の矢が繼ぎ、三の矢が繼ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に後の鏃が相接して、數本の矢がたゞもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然と

して、臂の上の茶碗の水はさゞ浪だに立たなかつた。一々の矢が的の正鵠を射たことはいふまでもない。
老僧は感嘆して「あゝ」と曰つたが、やがてつぶやいて、
「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」
と云つた。藏人は聞きとがめて、
「御僧、何とおつしやりました。」
と尋ねた。老僧は
「いや、詞で御答は出來ませぬ。拙僧と一しよに山へ御出で下さい。」
と云つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて從つた。
二人は遂に高い山の絶壁に攀ぢ登つた。斷崖は一面に苔

むきの浪に身は
かくろひてうけ
るかこと馬子の
かさゆくうまの
首ゆく
甲鳥園主人花
押

むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仭の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を託するに足るだけである。老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいた。見れば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼつて、踵まで沾して居る。老僧は云つた。



五十嵐力筆蹟

「足懸りは此の通りの大磐石で、向ふには松が枝に鳶が止つてゐて、無類の的で御座る。さ、御弓勢を御示し下さい。」

櫻井忠溫
陸軍大佐
明治十二年愛媛
縣生

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに御事は、前には誇る色があり、そして今はおど〳〵して居られるではないか。まだ一御奮發を要しませうぞ。」

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした、そして遂に驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

（甲鳥園隨筆）

二一　太白山の激戰

櫻井忠溫

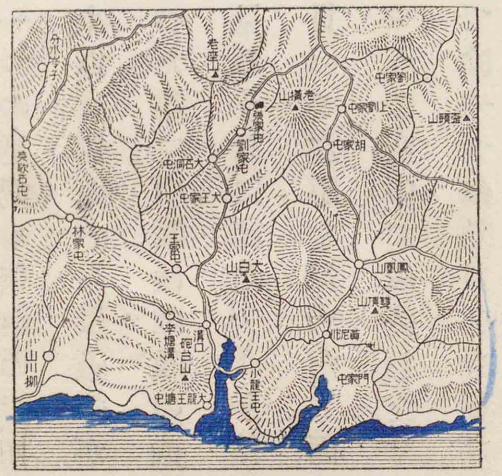
明くれば二十七日、旅團長より次の命令が下つた。

明治三十七年七月二十七日

前日來ノ將卒ノ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス。旅團ハ本日午後五時ヨリ太白山東方一帶ノ敵ヲ攻撃スル爲、全砲兵ヲ以テ砲撃ヲ加ヘ、左翼隊ハ砲撃ノ熟スルヲ待ツテ前進シ、敵ヲ攻略セントス。其ノ聯隊ハ此ノ好機ヲ逸セズ、死力ヲ竭シテ當面ノ敵陣ヲ占領スベシ。

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲門を開き、歩兵も亦全力を擧げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙に鎖された。飛彈の響は山谷を劈かんばかり。今度のは決戰であつたから、其の激しさは形容の語がない。我が歩兵は撃つては進み、止つては撃ち奮進又奮進。されど霰と落ち來る敵彈は眞向きに前進するのを沮む。「小隊長殿」と微かに響

くは最期の感謝。あつと叫ぶは三寸息絶ゆる聲。さりながら今は戰友の死を顧みるべき場合でない、一歩でも前進して敵陣に迫らねばならぬ。「旅團長閣下の命令には死力を竭せとあつたぞ。たゞ進め。進んで死ね。今は半歩も止るべきときではないぞ」と、將校は軍刀を揮つて、戰線を彼方に走り此方に駈けて士氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし一箇小隊の工兵も亦第一線へ增遣せられた。



太白山附近地圖

我が第一大隊は、遂に敵前實に二十米の近くまで肉薄した。されども、前に立塞がつて居るのは屛風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無いので、如何にあせつても攀登ることが出來ぬ。　側面からは敵彈がばら〳〵飛んで來る。　正面に向つた第二中隊は唯敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るうちにばた〳〵と仆れる。　一彈は松丸大尉の劍身を貫いて左眼を掠めた。　而して又我が砲兵の射擊は花火のやうに空中で破裂しただけのことで、敵の防禦工事に對しては、一つの効力をも奏さなかつたらしい。「榴霰彈では役に立たぬ、榴彈を爆發せしめて敵壘の掩蓋を碎破しなければならぬ。　これが爲には我が步兵が損害を受けても致方

が無いから、とにかく早く榴彈を發射してくれ。」と砲兵隊へ頻に傳令を派遣したが、一人として歸つて來るものはない、皆途中で僵れてしまつた。　工兵の小隊長に「爆藥を送つて來い。」と命じたが、それも間に合はなかつた。七時も過ぎ、八時・九時ともなつたけれど、形勢は依然として發展せぬ。　彼此する中に、夜は已に更けた。　物凄き下弦の月は淡く戰場を照して、陣地の半面を朧に露して居た。　この時左翼隊なる第二大隊長內野少佐より聯隊長にあてゝ左の意味の通報が來た。

我ガ大隊ハ今ヨリ全滅ヲ期シテ突擊ニ移ラントス。　貴官モ共ニ攻勢ニ轉ゼラレンコトヲ希望ス。　予ハコヽニ

謹ンデ告別ノ敬意ヲ表ス。

「折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、嚠喨たる「君が代」の喇叭が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘韻微かにながく曳いて、予等の腦裏に一入深く沁み渡つた。「君が代」の喇叭の聲は恰も陛下御身親ら「前へ」と號令せらるゝかの如くに感じられて、將卒は勇氣百倍、乍ち奮躍して、彈雨を冒し巖石を攀ぢて猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黒に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は聲を怒らして、

「突つこめ、突つこめ、突つこめ。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて「萬歳々々」を連呼して聲援を與へた。「山上には劍尖相擊つて火花を散

らし、接戰格鬪「これぞ大和男兒の最後の肉彈なるぞ」。傲慢無禮の此の仇、今ぞ思ひ知れや」と打込む太刀筋に血を流す伏屍の數知れず。慘といへば慘の至であるが、窮苦の極始めて敵を破り得たる我等が愉快は如何ばかり。海嘯の如き一團の後からは又一團と、我は續々兵力を增加するので、敵は遂に此の猛烈なる攻擊に堪ふること能はず、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染出したる頃、我が軍は確實に太白山一帶の高地を占領した。軍旗はひら〳〵と陣頭に翻り、萬歳の聲は潮の如くに涌いた。（肉彈）

櫻井忠温箸

ポケット Pocket

二三 汝の母

英國の一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時の事である。敵機の地に落ちるやいなや、敵の塹壕の前と知りつゝ、敵機の跡を追つて着陸した。見ると、敵機の翼は折れ、乘組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居つた。敵ながら、今まで空中に飛行して居つた時の事を思ふと、そゞろに物がなしく、屍體を片附けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、何か堅い物がある。取出して見ると、一葉の寫眞で、それに「汝の母」と書いてある。空中戰の最中にも、母の寫眞だけは身につけて居つたのである。取敢へず屍體を味方の塹壕へ運んで置いて、更に一囘の空中戰を試みたが、幸に武運強くて安全に味方の戰線に歸つた。歸るとすぐ其の屍體を處理したが、其の間は塹壕中の敵兵も一向發砲をしなかつたのは、それと知つたのであらうか。

その夜、英國士官の思は、射殺した敵と其の老母の上、つゞいて我が身の上から早く亡くなつた我が母の事に馳せて、感慨に堪へず、終夜まんじりともしなかつた。寐られぬまゝに、不幸なる敵の母へ手紙を認めた。

私はイギリスの飛行士官でございます。今日、私はドイツの一飛行機を射落して一つの功名をしましたが、乘組の士官が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに

此の手紙を差上げるのでございます。

私は御子息を殺しました。勿論、其の人を憎んでの事ではございません、又母御たるあなたの御心を察しないのでもございません。只これが戰爭といふ殘忍な仕事に於ける私の義務であつたのです。敵士官卽ちあなたの御子息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命は、其の爲に亡くなつてしまひます。此の不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、其の乗組士官の遺骸からあなたの寫眞を發見して、感慨に堪へないのでございます。

私は子供の時に母をなくしました。今でも人の母を見て羨ましく思ふのでございます。で、私の殺した敵士官が、あなたといふ母御をもたれ、最期までもあなたの寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分にはじつとして居られない感じがします。彼の人はもはや此の世の人ではございません。あなたも其の報知を得て、

空中戰

さぞ悲歎に暮れて居られませう。殺した私があなたに手紙を上げられた義理ではないとも思はれませうが、私としては、その人の母御に對して、丁度我が母に對する樣な親しい感じがするのでございます。私は御子息を殺しました。併し今、私があなたの寫眞を前に置いてあなたに向つて話をして居るのか、又は私が亡き母に向つて手紙を書いて居るのか、自分には區別がつきません。唯筆先に涙がはふり落ちるばかりでございます。御子息を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔の仕業でございます。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、さう思つて私の罪を赦して下さるでせう。そして、又御子

息の亡くなられた代りに、わたしは一人の母を得た樣な思のするのをお察し下さるでせう。今私の書くこの手紙は御子息と私と二人の魂が――殺された御子息と殺した私の眞心が――一緒になつて書くのだと思つて下さい。もう此の上には何も書けません。御察し下さい。

此の手紙はイギリス軍の本營から本國外務省へ送られ、それから中立國の手を經てドイツなる宛名の人に屆いた。それを讀んだ時の老母の感じはどんなでございましたらう。

數日の後に、長い手紙がその英國士官へ參りました。

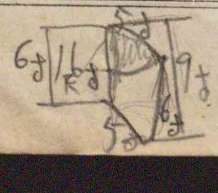
悴の戰死は承知して居りましたが、あなたから、こんな情

深い御手紙を請取らうとは思ひも懸けませんでした。通常ならば、悴の仇といふべき所ですが、御手紙を見ますと、悴が再生して、此の母に手紙を贈つてくれた樣に思はれるのです。 あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母に對する心持がすると云はれる樣に、あなたの御手紙は、私にとつては戰死した悴の手紙としか思はれません。 あなたは、悴を殺したといはれます、事實又それに違ひはありますまい。 併し殺すも殺さるるも、御互の國の爲で、個人としては何の怨もありは致しません。 只仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私にも亦あなたが死んだ悴の身代りの樣に思はれるのは、何たる不思

議な事でせう。

併し、思へばこれも不思議ではございません、同じく神の愛子として、御同樣に眞の愛情を汲み得るのです。 死んだ悴もあなたを兄弟と思ひ、つゆ怨がましい心を懷かず、今は天上に居つて、この世に生殘つた母と、又不思議に兄弟になつたあなたと、又他の兄弟との爲に、心の平和を得るやう、神樣に御願をして居るに違ひございません。

三人の男子の中、戰死したのは末子ですが、二人の兄もやはり戰線に出て居ります。 何時弟と同じ運命になるかも分りません。 併し私は、末子の戰死した爲にあなたといふ新な子を授つて、益深く神樣の御心を汲み得ました。



今後如何なる不運が來ようとも、神に對する信仰は愈、厚くなるやうにと祈つて居ります。

やがて戰爭が濟み、平和の時が來て、そして二人とも無事に歸る事になれば、私のこの家へ一度あなたに來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ悴とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滯在して下さい。私はその日の早く來るやうにと祈つて居ります。

そして最後には「汝の母」と書いてあつた、彼の寫眞にあつた通りの筆蹟で。（「時局に關する教育資料」に據る）

西條八十
詩人
明治二十五年東京生

二三　芙蓉の花

西條八十

おそろしきなゐも去りたり。
靜かなるわが家の庭に
今日も咲く芙蓉の花よ。

わが兒等は何時ものの如く
おりたちて砂ほり遊ぶ。
今日のみは、嗚呼わが兒等よ、
その赤き鋤ををさめよ。

おそろしきなゐと焰とに、
あまた世の幼兒どもは
親の手に抱かれて失せぬ。

その小さき鋤を見るだに
あはれなる葬を偲ぶ。
わが胸はいま痛むなり。

今日のみは、嗚呼わが兒等よ、
つゝましく傍に坐して

亡き友のために祈れよ。

あはれ幸うすきその魂ぞ、
かの白き芙蓉のごとく
うるはしく穢なかりし。

（噫東京）

二四　猫

夏目漱石

夏目漱石　名は金之助　文學者　東京生　大正五年歿　年五十
ボール　Ball
バット　Bat

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つ事が出來ない。だからボールもバットも取扱ふことが出來ない。次には金がないか

ら買ふ譯に行かない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。緣側と並行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。今吾が輩の云つた垣巡りと云ふ運動は、此の垣の上を落ちない樣に一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くと御慰みになる。ことに處處に根を燒いた丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出來がよかつたので、朝から晝迄に三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白

くなる。到頭四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間ばかり向ふに列を正してとまつた。

「是は推參な奴だ、人の運動の妨げをする。ことにどこの烏だか籍もない分際で、人の塀へとまるといふ法があるもんか。」と思つたから「通るんだ、おい、退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見てにや〳〵笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衞門と云ふさうだが、成程勘左衞門だ。吾が輩が

いくら待つてゝも挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないからそろ〳〵歩き出した。すると眞先の勘左衞門がちよいと羽をひろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨て置くのではないが、如何にせん只さへ骨の折れる道中に、勘左衞門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつゞかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へはとまりつけて居る。從つて氣に入ればいつ迄も逗留

するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ落ちんとは保證が出來んのに、こんな黑裝束が三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此の邊には見馴れぬ人體である。口嘴が乙に尖つて、何だか天狗のまうし子の樣だ。どうせ質(たち)のいゝ奴でないには極つて居る。退却が安全だらう、餘り深入りをして萬一落ちでもしたら尙更恥辱だ。と思つて居ると、左向けをした烏が阿呆と云つた。次のも

眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾が輩でも是は看過出來ない。第一自己の邸內で烏輩に侮辱されたとあつては吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうと云ふなら、體面に關る。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆と云ふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。「進めるだけ進め」と度胸を据ゑてのそ〳〵步き出す。烏は知らん顏して何か御互に話をして居る樣子だ。愈癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合はせてやるんだが、殘念な事には、いくら怒つてものそ〳〵としかあるかれない。漸くの事先鋒を去る

こと約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせた樣にいきなり羽搏きをして一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顏を吹いた時はつと思つたら、つい踏みはづしてすとんと落ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顏を見おろして居る。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが、益駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つて居た。それが惡

坪内逍遙　名は雄藏　英文學者　劇作者　文學博士　早稻田大學名譽教授　安政六年（二三一九）美濃國生

シャツ　Shirts

ネクタイ　Necktie

い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。（吾輩は猫である）

二五　蛞蝓と螽斯

坪内逍遙

「ある庭園」

螽斯は例の紙製の假面を被り、背中に同じく紙製の翅をつけ、白地に緑色竪縞のシャツを着同じ柄のズボン下を穿いて、眞赤なネクタイを胸元に結び垂れ、金の腕時計をはめ、シガレットを吹かしてゐる。蛞蝓は鼠色の布で拵へた袋をすぽりと頭から被つて、裾を長く穿き、顔の處だけに緞子を張り、針金製の角を折々出す。始終這つてゐる。

シガレット　Cigarette

螽「相變らず君はぬらくらと寢そべつてばかりゐるねえ。」

蛞「寢そべつてゐるんぢやないよ。君達と違つて、僕等は何時だつてかうしてるんだ。歩く時だつて、駈ける時だつて。」

螽「はゝゝ、『駈ける時だつて。』が聞いて呆れらあ。一體君は一日に何町歩ける。」

蛞「休まずに歩きやあ、五里でも十里でもあるくよ。」

螽「大きく出たね。ぢやあ二三間の處でもいゝが、僕と競走して見るかい。憚ながら、僕は三つも飛びや二三間も先へ御到着だよ。」

蛞「僕だつて、まさか君なんかに負けない積りだ。」

スクエアした Square 自乘した

螽『まさか』―だ。へつ。ほらも休み〳〵言ひたまへ。」

蛞(怒って)「何がほらだい。」

螽「ほらもほら、大ぼらに乏をかけて、さうして輪をかけて、スクエヤしたやうなほらだと言ふのだ。」

蛞(いよ〳〵怒って)「失敬な。」

と角を出す。

螽「はゝ、そんなへら〳〵の角なんか、誰が怖がるもんか。」

摑み合をしさうになる。そこへ近所の蜘蛛が仲裁に這入る。蜘蛛は頭の上に紙製の蜘蛛の形を笠のやうに載つけてゐる。黑ずんだシャツを着て同じ色のズボン下を穿いてゐる。

蜘「おい〳〵、よせ〳〵。どうしたんだ。え。」

蛞「だつて、螽斯があんまりなことを言ふもの。」

螽「なあにね、生意氣に、奴めが僕と競走し得られるなんて言やあがるもんだから、それでその……。」

蜘「まあ〳〵、論より證據だ。出來るといふなら、やつて見たらいゝぢやないか。何なら、僕が審判役にならうから。」

螽「だつて君馬鹿々々しいやね。てんで相撲になりやしないもの。」

蛞「やつて見もしないで、どうしてそんな事が言へる。」

螽「おや、どこまで生意氣だらう……。よし、ぢやあやらう。」

蜘「それがいゝ、それがいゝ。ぢやあ僕が(と絲を繰出す眞似をして)かういふ風に線を引いて、間數を測るよ。(絲を繰る眞似をして、三四間先まで走つて行つて)さ、こゝが決勝點だよ。こ

スタート
Start
出發

の木が目標だよ。……さ、用意。」

螽（蛞蝓に）「さ、構はず先へ這出しな。一しよにスタートしちやあ大人氣ないから僕は二三分後れて出かけよう。それで澤山だ。どれ、一服やらかさうか。」

巻煙草を出して吹かしてゐる。

蛞「ぢやあ、出るよ。」

螽「いゝとも、〳〵。」

蛞蝓、這ひはじめる。

螽（尻目に見て）「どうだ、あのざまは。（腕時計を見ながら）まだやつとあそこまでだ。……（巻煙草をすてゝ）どれ、そろ〳〵。まづ一つ飛んで驚かしてやらう。憚ながらたつた一とびでずつとお先へだ。」

と飛ぶ。と、見當がずつとそれて、約一間も左へ飛ぶ。その間蛞蝓は同じ速度で目標の方に進む。

螽「おつと、あんまりはずみ過ぎた。今度は前の取返しに大飛だぞつ。」

と大きく飛ぶ。と、又ずつとそれて、一間半も右へ飛ぶ。かうして二三度飛廻つてゐる中に、蛞蝓は目標の處へ到着する。

蜘「蛞蝓君、萬歳。」

螽（呆れて）「おや〳〵、おや〳〵。」

蜘「おい〳〵、螽斯君、もう駄目だよ。君が負けた。つまり君はまるで目的をきめないで以て、むやみやたらに飛跳ねるんだから駄目だよ。これからは飛ぶ前に先づちやん

と目的をきめ給へ。（週刊朝日）

萩野由之　國學者　文學博士　東京帝國大學教授　佐渡國生　大正十二年歿　年六十四
保昌　丹波・大和・攝津等の國守に歴任した　長元九年（一六九三）歿　年七十九
源頼信　滿仲の子　頼光の弟　鎭守府將軍に任ぜられた　永承三年（一七〇八）歿　年八十一

二六　保昌と袴垂

萩野由之

藤原保昌といふ人は大納言藤原元方の孫で、母は醍醐天皇の御孫であつた。だから身分も立派な人であるが、柄に似合はず力が強く、武藝に勝れて、源頼信等と同じく武勇を以て知られてゐた。當時の風習は、文官でも、武人でも、高尚な人は皆音樂の嗜があつた。中でも保昌は殊に笛が上手であつた。

夜中は既に過ぎて、町々は皆寢靜まつた頃であつた。保昌は月の皎々たるまゝに、興に乘じて例の笛を取出し、これを吹きつゝ家路についた。此の時の保昌の心は、笛の音が月と共に澄渡つて、その音律が自然に通ずるのを喜ぶほかには何物も考へなかつたであらう。眼に入るものは、月と我との外には何物もなかつたであらう。まして強盜がぬき足さし足で背後から切りつけようなどとは夢にも知らなかつた。

當時は警察制度の不備な爲に、京都の市中には強盜追剝の類が甚だ多かつた。中には隊を組んで人家に押入る者さへあつた。これらの輩の巨魁に袴垂といふ者があつた。そろ〳〵夜寒になつたから、一かせぎして衣服を調達しようと、ある夜ひそかに市中を鵜の目鷹の目。折しも一人の

士が、美しい衣服を着て、從者も連れず、唯一人、しかも夜中すぎに、笛を吹きながら徐行するのを見出した。「あゝ、よい椋鳥がかゝつた。これこそ着物を我にくれる爲に來たやうなものだ。」と喜んで尾行した。然るに彼の士は一向知らぬ風で、依然として笛を吹きながら徐行する。少しも氣附いた様子がない。袴垂もさすがに不審に思つて、手出しもせず、そのまゝ十餘町ついて行つたが、やはりかの士は笛を樂しみながら歩いて行く。袴垂は臆して手が出ない。

袴垂が心を取直して、一思にと刀を拔いて走りかゝると、彼の士は始めて笛を止めて立止まつて、「何者だ。」と一喝した。さすがの袴垂も魂を失つたやうになつて、もはや逃げも匿

保昌と袴垂（大蘇芳年畫）

れも出來ぬと觀念したから、「私は追剝で、袴垂といふ者でござる。」と答へた。その時彼の士は、「さやうな者が居るとは聞いてゐた。さあ、おれについて來い。」と、また笛を吹きながら歩いて行つた。袴垂もその態度應答の工合で非凡な人だわいと思ひ、鬼神にでも捉まつたやうに、畏る畏る隨行した。やがて大きな

賴光　源滿仲の子　東宮大進に任ぜられた　治安元年（一六八一）歿
貞道　村岡五郎貞道
季武　卜部六郎季武　秀國の子　治安二年（一六八二）歿　年七十三
源綱　渡邊綱
坂田金時　通稱主馬助

門のある家へ入つた。彼の士は再び出て來た。そして綿入の衣服を袴垂に取らせて「此の後うつかりした事をして過ちすな。」と言含めて歸らせた。袴垂は生返つたやうな心地がしてその家を立去つた。この士が卽ち保昌であつたのだ。

其の後袴垂が他の犯罪で捕縛された時「今までに恐しかつた事は唯一度ある。それは月夜に笛を吹いて通つた人をねらつた時であつた。」と物語つたと云ふ。

世に武將の四天王として、一に賴光、二に保昌、三に貞道、四に季武と數へるが、平貞道や平季武は源綱・坂田金時と共に賴光の部下の四天王で、保昌と肩を比べる人ではない。賴光は武將として保昌と匹敵するが、保昌のやうな優美の點が缺けてゐるやうに思はれる。賴光が市原野で鬼童丸を殺したのは、彼が武勇談の一つであるが、その時は綱や貞道が隨行したのであつた。のみならず、強盜一人を三人がかりで切殺したのである。

市原野　又櫟原野　京都府愛宕郡鞍馬の山口

高村光太郎　彫刻家　詩人　明治十六年東京生

保昌が月下の笛に心を澄まして、袴垂が月の雲隱を伺ひつつ近寄つたのを知らぬ態度の大きさは、また格別ではあるまいか。

（史談と文話）

二七　かゞやく朝

高村光太郎

目がさめると天井があかるい。

ゴブラン Gobelin 佛國の巴里で織出す一種の綴錦花毛氈

そとの松の木に五六羽來て騷いでゐる雀の聲。
おやと思つてはね起きると、
枕もとの窓かけ一ぱい日が當つてゐる。
お天氣だ。
お天氣だ。
たうとう雨がはれたのだ。
九月からかけて
四十日あまり暗くつゞいた雨、
青玉のやうな東京の秋の空をめちやくくにし、
秋の木の葉のゴブラン織を憂鬱の色にぬりつぶし、

カダンス Cadence 音調 調子

シーツ Sheet 敷布

毎日々々
はてしなく濕つぽい調子(カダンス)ばかり聞かせてゐた雨、あの
雨がはれたのだ。
忘れかけてゐた日の光が
窓かけをあげると、まばゆい強さに、
斜に、幅びろに、機嫌よく流れこんで
白いシーツにつきあたる。
手にうけて振りたいほど
活潑に飛びはねる。まるで生きものだ。

バケツ Bucket 亞鉛製の桶

たちまち私の心はをどり出し、
着物もそこ〳〵二階の窓をあけ放つ。
こんな朝一人でゐるのがもつたいなく、
遠い故郷に歸つてゐる人のことをちよつと考へて、
手をあげて合圖したいやうな、
おはやうと言つてみたいやうな氣になり、
つい微笑して部屋のそこらぢゆう見まはす。
何から何まであかるく、
うれしさうで、
とんでもない奥の方の唐紙の隅にまで、
窓ぎはのバケツから反射する。

レース Lace

おゝ太陽がまろくをどつてゐる。
わたしはともかく下へおりる。
少し暗い梯子段を下りて、廊下づたひに
いろんな室の戸をあけ、窓をあける。

到るところ日の光。
大窓のレース越しに、
そして又櫻の木の枝越しに、
ぱつとあびせかける黄金の陽が、
まだ少しひやつく大部屋一ぱいに
不思議な映畫をうつし出す。

タオル Towel 西洋手拭

あたりの家具も道具もすつかり大きな眼をあけて、
みんな私の方を見る。
わたしも一々挨拶して、
椅子のあたまをかろく撫でさすりながら、
折目のついた新しいタオルを持出して流しへ行く。
蛇口から勢よく出る水が、
白瀬戸の洗面器に渦を巻いてほとばしると、
おゝこゝにも一條の日の光が
さつと水を透きとほし、
ぎらつく波紋を起して私の手にからみつく。

何はともあれ箒を持つて外へ出る。
まだ早い出來たての空氣を存分に吸ふ。
入口のだん／＼に立つて、
幾層倍も大きくなつたまつ青な空を見あげる。
どこから出たのか、
數かぎりない赤とんぼが、
ぴか／＼ぴか／＼飛んでゐる。
しぶくさびた櫻のはがくれに、
思ひがけない金色の柿の實が
おしやべりな頰白をじらしてゐる。
子供のやうに嬉しくなつた私の心は、

珍しい天と地とのはれやかさにはしやぎ、
はるかに町のどよめきを聞きながら
東京のちまたに滿渡る今朝の歡の聲を思ひ、
種々さま〴〵な世相のおもかげと場合とを
それからそれへと空想する。
か丶る時、だしぬけに、
「い丶お天氣さまでございます。」と、
隣の植木屋の岩乘らしいおぢいさんが
孫を抱いて門から出て來る。
人通りもまだあまりない往來の
しつとりとしたからたちの垣根を背にした

鶴見祐輔
法學士
前鐵道省參事
明治十八年群馬縣生
今年の秋
大正十二年十月

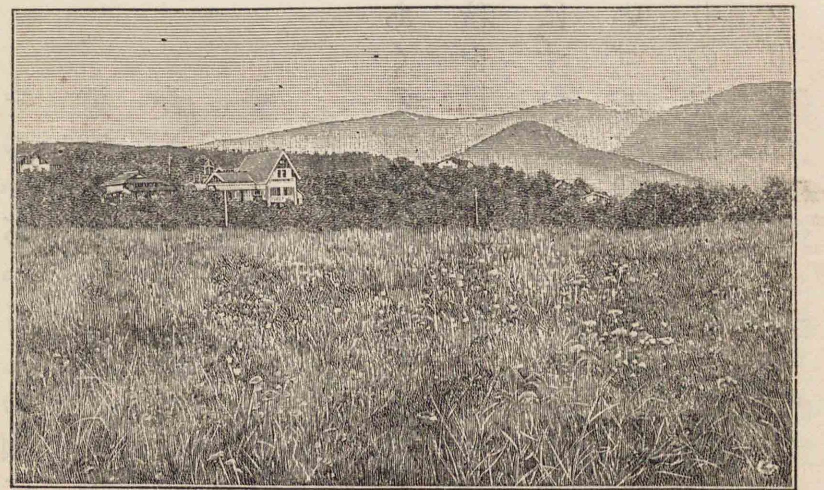
そのおぢいさんの顏に、
遠慮のない氣さくな太陽が、
お丶こ丶にも照つてゐる。（明星）

二八　秋の輕井澤

鶴見祐輔

あくる朝床を出て、窓を押した時に、自分ははじめて今年の秋を見たと思つた。自分たちの泊つた二階の窓のすぐ前に、すれ〴〵に檜が幾株か植ゑてあつて、その枝の間から、廣いゴルフの庭が見える。四方山に圍まれた二十町歩ばかりの谷間の野原に、一昨年頃から手入れをして、輕井澤ゴルフ俱樂部が出來たのである。

淺間　信濃・上野の國境に峙つ活火山



輕井澤

左にだしぬけに峙つてゐる離山と、右に緩やかに波打つ小瀬連山の間から、稍黝みがかつた紺青の色をした淺間の頂が僅かばかり覗いてゐる。右の山の麓に生えた幾百株の槲の林は、赤褐色の葉が霜にうたれて縮んでゐる。左手の離山の裾は、夏は眞青に茂つてゐる雜木林が、今は大方紅葉して、濃淡とり〲

の文をなしてゐる。その槲の林と雜木林との間に、やゝ爪先あがりの廣い原が、見渡すかぎり續いてゐる。ところどころに櫟や槲が一二本あるだけで、一面の芝生である。それが丁度、秋の半ばで黄ばんだ色でべつたり塗つたやうに見える。空の底まで拔けるやうな秋晴で、暖い日が一切の物象の上に、洪水のやうに降りそゝいでゐる。

輕井澤に遊ぶ人が皆一樣に感じるのは、この地の大氣が澄みきつてゐることである。雨あがりの五月の曙のやうな綺麗な空氣で、しかも、それが乾き切つてゐる。濕氣と塵埃との二つから、全く解放されてゐる。濁つた重苦しい都會の空氣に抑へ附けられてゐた人間の魂が、此處へ來ると、い

碓氷峠　關東平野の上野から信濃の高原に通ずる峠
夫人　其の家の主婦
主人　アメリカ人　名は分らないが作者の知人である

つも、はた〳〵と輕く羽ばたきして廣い自由な世界に翺翔していくやうな氣がする。

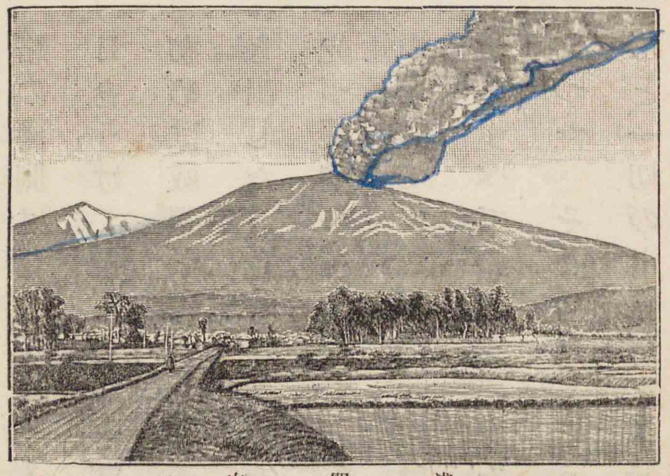
すべての木の葉草の葉が、天然のまゝの色をして、夏は青々と、秋は黄と赤と鳶色とに輝いてゐる。そして草の葉の香りが高い。その間を白い道が靜かに連なつてゐる。

お天氣がいゝから朝のうちに碓氷峠まで往かうと、夫人がいひ出した。しかけた用事のある主人だけ殘して、自分たち四人が出かけた。緋の紅葉の模樣のついた着物を着た和子(かずこ)は、赤い鼻緒のついた下駄を穿いて、大人と同じ歩速を保つために、小走りに走りながらついて來た。

薄ら寒い程の朝だが、歩いてゐるうちに少し汗ばんで來た。路の兩側は背丈を沒するやうな薄である。白い穗が秋の日をうけてきら〳〵と輝いて居る。

初めは威張つてゐた和子も、坂の中腹でたうとう弱音をふき出した。色々な理窟をつけて道草を喰はうとし出した。先づ龍膽の花を摘むといひ出した。それから栗を拾ふと申し立てた。その次には、道端で折紙をしようと提議した。そのすべての名案の底を流るゝ彼女の希望は頗る明白であつた。そこで、たうとうおんぶすることにする。さうすると、一切の申立が立ちどころに雲散霧消した。中程の茶屋のところから、汗をふきながら、脚下に横たはる

輕井澤の高原を眺めて居ると、東京で大地震があつたといふことが、うそのやうな氣がして來る。錦のごとき峰巒の懷に抱かれて、平和な山村が秋の日の下に輝いてゐる。



淺間山

と見ると、右手の雜木林の頭から淺間山がのぞいてゐる。その澁い紺青の色調と、何の奇もないやうな無造作の姿とが、ある親しみをもつて自分に迫つて來た。

夏の夕べ、夕日が落ちて大空が次第に光明から薄明、薄明か

ら夕闇に變つていく時分、じつと立止つて淺間山のいろの變化を觀察し驚嘆したことのある人々は、必ず再びこの山を訪うて、秋の淺間の深い色を眺めなければならない。夏は周圍の木の葉が悉く一色の綠である。しかし、秋は一切の山々が黃ばんだ明るい色になつてゐる。そして空も大氣も、夏と異なる靜けさに沈んでゐる。それが淺間の紺青の色を一層引立たせて見せる。

富士は日本に特有な山であるといふ意味に於て、色々の感じを呼起す。しかし、自分は、多く謳はれざる淺間の山容を愛する。それは明かに、輕井澤の最も大切な存在理由を形づくる。

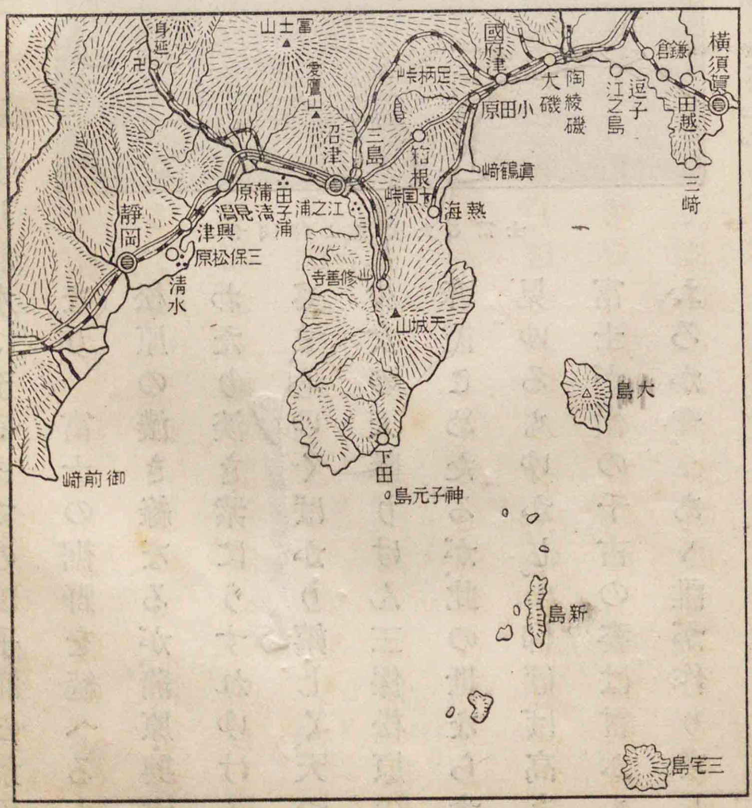
高山樗牛
名は林次郎
評論家
文學博士
山形縣鶴岡町生
明治三十五年歿
年三十二

嘲風
姉崎正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教授
明治六年京都府生

二九 十國峠

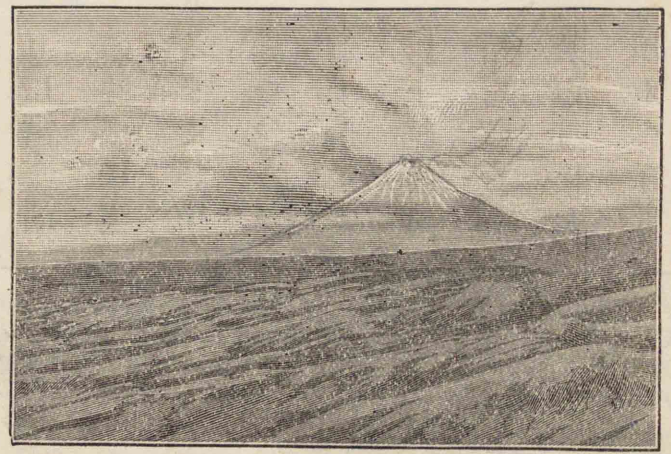
高山樗牛

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊なりき。此の峠は、函嶺より天城に連る所謂富士火山脈の一峰にて、巓に上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國・五島を眺め得べしとぞ。ある日、空晴れわたりたるに、われ嘲風とこゝに遊びき。山の巓は熱海より五十町を出でざれば、いたう高しとは言ひ難し。されど、相・駿二州に跨りて北は足柄・箱根・富士より、南は天城・神子元島より、大島・三宅島の山々を望み、西は江浦・靜浦を眼下に見おろし、名も高き田子浦づたひに、淸見潟より三保松原かけて遙かに遠江なる御前崎に至るまで、東は眞鶴崎のあなた、小田原・國府津・淘綾の磯邊に沿うて、江島・鎌倉の山々より田越・三崎のはてに至るまで相模灘を包みて、かすかに安房・上總の遠巒を望む。景物の壯大類ふべきものなし。



十國峠附近圖

殊に美はしきは、江浦より淸水に至るまでの田子浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き綠なるが、蒲原・興津わたり淡き紫にうすれゆけるさま、心ゆくばかり嬉しく、天つ少女の天降りけん三保松原の春霞こめたるが、此の世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が嶺の千古の姿は言ふもおろかや。あゝ誰が作りなしけん自然の麗しさぞ。



十國峠より見たる富士

箱根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きさなりしが、谷開け、風加りて、漸く擴り、はては八峰の全面を掩ひて藹然として西の方にたなびきぬ。愛鷹(あしたか)の峰にかゝるころ、富士颪に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、二山の間に白雲の壁を築けり。其の頂、山風に散じて滿天を覆ひ、濛々として咫尺を辨へず。我、衣襟をあはせて凝眸すること多時。少時にして空霽れて、函嶺の崔嵬、富嶽の淸容、もとの如し。滿天の雲霧、その何處にゆきたるかを知らざりき。（樗牛全集）

三〇　明治天皇の御遺物

笠井信一

笠井信一　當時の巖手縣知事　今は貴族院議員　慶應元年（二五二五）生

先月 大正二年一月

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出されましたので、例刻に參内致しましたところが、十一時すぎ特別の思召によつて權殿參拜を許されました。 權殿と申すは、崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。

それから更に奧殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。 御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。 先帝には長く茲に在らせられて、德教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。 然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外な事で、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が却て遙かに御立派である。 餘り廣くない二間續きの御部屋で、檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。 御机も御椅子も實に御質素なものです。 絨毯の如きは最初敷かれた儘ですから、後には色も大分褪めて參りました。 それで、侍臣から御取替のことを屢願ひ出ましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。 此の御部屋には、先帝の御學問所に於て御使用になつた御遺物全部其の儘に据置かれてございます。 これは今

テーブル Table

上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日卽ち先帝最後の出御當時の儘に御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍が數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどとは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらつしやつた

とき、臣下より政務の言上がありました。先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて此の燒痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸

の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鋏も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御　机　（明治神宮寶物殿藏）

ホワイトシャツ White shirt
ボール Board

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所において遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで侍臣より御取換を願ひ出ましたが、「なに、これでよい。」と仰せられて御許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍從が「此の邊が犬の皮です。」と説明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが澤山に積重ねてございましたから「何に遊ばす物か。」と

侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて御手許に留置かせられたものであるとのことでございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。　そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。　それを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうでございます。　實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば一として無用の物はない。　先帝はかく萬機の政を聞召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、些かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。　一天萬乘の大君におはしましながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。　皆是節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

偖、御次の間には、造花や彫刻や種々な物品が備へられてご

ざいました。之を拜見いたしまするに、「學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵の爲御持歸り、又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてゝ殆ど裝飾の用を爲さぬものまで其の儘になつてございます。その他美術工藝品の如きも皆御奬勵のためで、俗人の好みとは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
ます樂みはあらじとぞ思ふ。

とございますが、實にこのやうな御樂みを求めさせられん

が爲、先帝には長い年月の間、大なる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民のちからのかぎりつくすこそ
わが日の本のかたためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても力のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかため」のため應

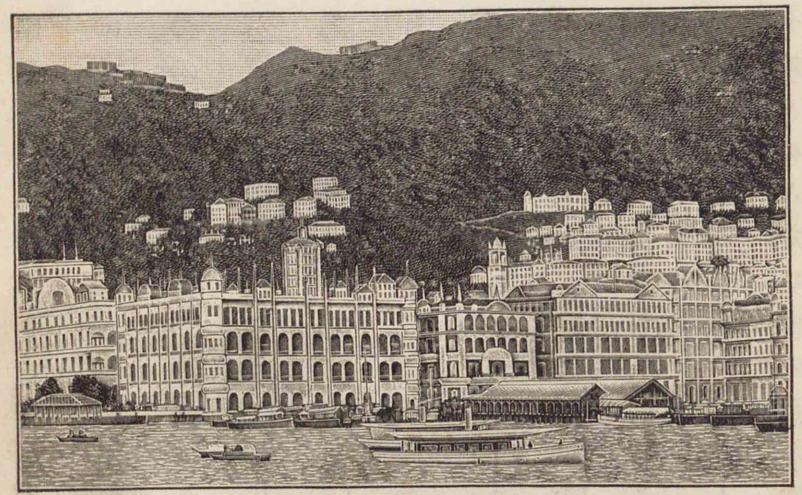
吉江孤雁 名は喬松 文學者 早稻田大學教授 明治十三年長野縣生
上海 支那揚子江の河口 東洋第一の貿易港
香港 支那廣東河口にある一小島

分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。（巖手縣學事彙報）

三一 波に咲く花

吉江孤雁

上海を出て、臺灣海峽を通つて三日間ばかり行くと、香港といふ英國領の島に着きます。こゝは全くのヨーロッパ風で、市街が、小さな、そして高い山を中央にして、島を取巻いて建つてゐます。美しい立派な廣い路が島の周圍を繞り、次第に山の中腹まで繞り繞つて登つて行きますが、山の頂までは、外國人は何人でも登ることは許されません。なぜならば、この島はイギリスの東洋での大切な商業の港である



香港

と同時に、大切な要塞砲臺のある處で、その要塞の設備を外國人が見てはならないからです。

この島にも、日本人はなかなか澤山商業をやつてゐます。會社の代理店などはいくつもあります。香港の市街の美しさは夜です。そして、それは港に碇泊してゐる船から眺めやつた景色です。海

シンガポール
Singapore「新嘉坡」亞細亞の東南部海峽植民地の港市
英領

棕櫚の花咲く
椰子の實みのる
共に池邊義象の「世界一週唱歌」中の句

岸より山の中腹までだん〳〵高くなつてゐる家屋のあらゆる窓から電燈が輝いて、ちやうど大きな蜂の巣の一つ一つの孔に燈火をつけたやうです。そして港の中を通ふ小蒸氣は花電車のやうに美しく飾つて、あちこち走り廻つてゐます。香港まで來ると、いかにも洋行したやうな氣になります。

香港から先はシンガポールといふ港です。「棕櫚の花咲くシンガポール」と皆さんが歌ふその港です。こゝはもう熱帶で、地面から、空中から、暑さがどつと人の身體を包みます。船からおりて市街を通ると強い花の香やら、水菓子屋の前で嗅ぐやうな果實の香氣やらが鼻をうちます。こゝの公

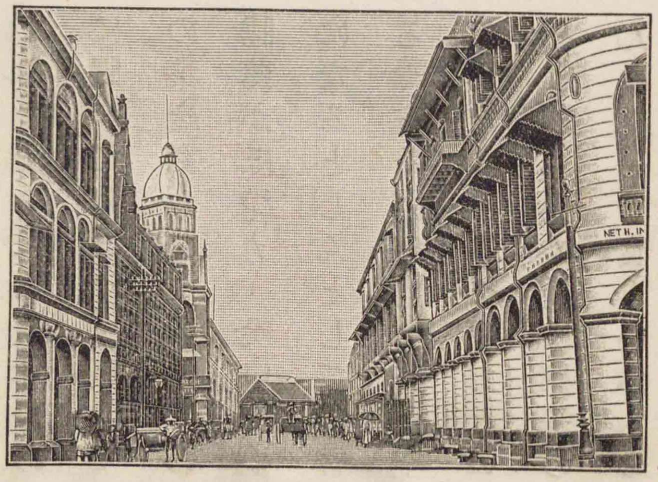
セーロン
Ceylon「錫蘭」印度洋中の一大島
英領

園へ行くと、眞紅な幹をした檳榔樹が眞青な葉をして立つてゐます。又六七寸もある金色や青色のとかげが草の上に眠つてゐます。そして木の枝には栗鼠がかさ〳〵と木の葉を動かして飛んでゐます。そして水の面には紫色の睡蓮がぽつ〳〵咲いて、夢でも見てゐるやうです。眞晝頃になると、しんとして物音一つも聞えません、たゞむせかへるやうな強い光の香が空中に漂つてゐるばかりです。全く異なつた國へ來たといふ心持がします。

それから先の港は「椰子の實みのるセーロン島」です。皆さんは椰子の實といふものが樹になつてゐるのを見たことがおありですか。大きな猿の頭のやうな形をしたのが、幾

ナイフ Knife

つも幾つも、高い樹の上になつて、いかにも重さうに見えます。その外皮をむいて、また眞中から二つに割つて、中の眞白な實をナイフでそいで、生で食べたり、煮て食べたりします。生栗を食べるやうな味のするものです。



新嘉坡

船の上から見ると、この邊の海岸は、ちやうど日本の海岸が松の林で覆はれてゐるやうに、どこまでも椰子の木で覆はれてゐるのです。そして

船が港に着くと、どこからともなく、眞黒の子供が小船に乘つたり泳いだりして、その船の周圍に集つて來ます。ちやうど眞黒の大きな魚の群のやうです。これが何かわいわいいひながら、水を潛つたり、浮上つたりして船のあたりを騷ぎまはります。これは乘客から錢を貰ひに來たのです。そして銀貨を投げてやると、すばやく小船の中から飛込んで、銀貨の水中に沈んで行くよりも早くその下へ廻つて、巧に受止めるのです。その巧なこと、どんなに遠くへ投げても、また船の眞下へ投げても、一つとして受損ずるやうなことはありません。水中でも、水の表面でも、自由自在に飛びまはり泳ぎまはるには驚かされます。

地中海　歐羅巴と亞弗利加との間にある海

喜望峰　Cape of Good Hope　亞弗利加洲の南端に近き岬

セーロン島を出た船は、普通ならば印度洋を横切つて、紅海を通つて、地中海へ出るのですが、私の乘つた船は、戰爭最中で地中海が危險だといふので、印度洋を南へ〳〵と下つて、赤道を越えて、アフリカの南の端の喜望峰といふ處へ向つたのです。

地圖を披いて御覽なさい。セーロン島から喜望峰までは隨分長い間です。船はちやうど十七八晝夜、山も陸地も見えぬ水の上、いくら四方を眺めても何一つ見えぬ大洋の上を走つて行つたのです。

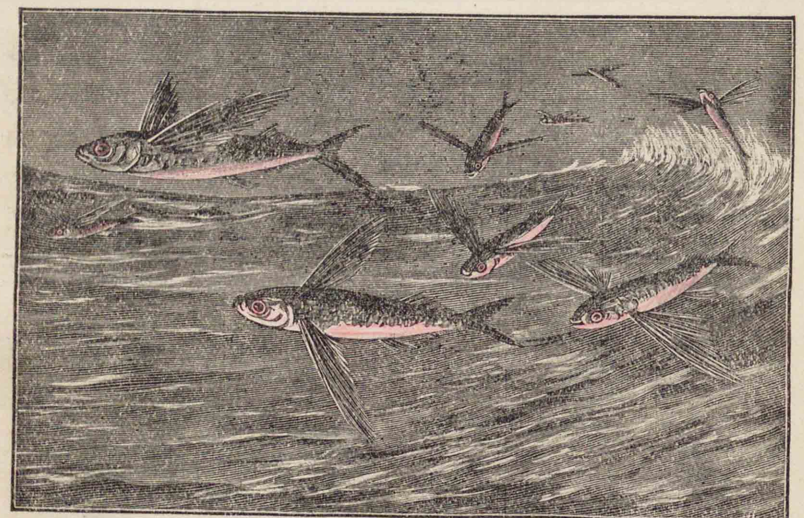
ところが、船が赤道を越える前後に、無風帶といつて、年中風の少しもない處があるのです。我々の地球の表面の眞中を帶のやうに取卷いてゐる一帶がそれです。そこは鏡の面のやうに平かで、どつちを見ても小波一つ起りません。たゞ船脚に碎ける波が、深い眠から覺めて驚くやうに、少しばかり騷ぐだけです。眞青な水、目が眩むやうな日の出、一片の雲もない大空、まんまるく四方を取圍んだ水平線。我我の船は今やこれらの眞中にゐるのです。そしてその船から立上る煙は眞直に立つて、少しも亂れません。太陽は帆柱の眞上から光を放ち、ちやうど鏡張の室の中へでも身を入れてゐるやうに四方に照渡つて、實にさわやかな氣持です。

けれど、廣い〳〵大洋の眞只中に、生きて動いてゐるものと

スクリュー 螺旋式推進機 Screw 暗車

ては何もありません、又何の音も聞えません、たゞ我々の船ばかりです、我々の船のスクリューが立てる音ばかりです。かやうに靜かな眠の國を一日か二日か航行して御覽なさい。明るいけれど、何ともいはれない寂しさのあるものです。

そんな時に、波の上を不意に掠めて飛んで行くものがあるのを思つて御覽なさい。何でせう。銀色をした小さな魚が列をつくつて、縱に橫に波の上を舞つて行くのです。小鳥ぐらゐの大きさに見えますが、實際はそれより大きいに違ないのです。飛魚です。今まで油のやうに淀んでゐた眠の海、死の海の中へ不意に大きな船がはいつて來て不思



トビノウヲの飛翔

議な姿をして波を切つて行くので、びつくりして俄かに波の中から飛立つたのでせう。一列になつて十も二十も飛んで行くのがあるかと思ふと、橫に並んで競爭するかのやうに、後から〳〵と飛出すのもあります。その銀色にきらきらと光るさまは實に一大壯觀で、目もくるめか

んばかりです。
これが波に咲く花です。そして、これこそは此の無風帶に於けるたゞ一つの波の戯です。たゞ一つの生きたものゝ姿です。

船がこの無風帶を出抜けると、波がそろ〳〵高くなつて來ます。今まで滑るやうにしてゐた大きな船體が搖れはじめます。波の大きな頭が遠くから眞青になつて起つて來ると、いつの間にかその波頭は船の底へ滑り入つて、船を持上げます。船は思はず前後によろめき、船底のスクリューはさも苦しげに音を立てゝ忙しく回轉します。けれどこれぐらゐはまだ何でもないことです。船が次第々々に日

大類伸　歴史家　文學博士　東北帝國大學教授　東京市生

ヴェニス　Venice

ポー　Po. R.　伊太利北部の川　アルプス山中に發し東流してアドリヤ海に入る

を重ねてアフリカの岸近く寄つて行きますと、潮の流が急になり、船の動搖が一層烈しくなつて來ます。さうすると、どこから出て來たのか知れないが、眞白な大きな信天翁といふ海鳥が、船の上を、また船の周圍を包んで飛びまはります。

（趣味の紀行文）

三二　水の都

大類伸

ヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。

此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居

リヤルト Rialto

り、又海に向つては長く斗出した海峽によつて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の內は安全な一箇の城郭の樣なものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれてゐる。中世の始め、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むことになつた。これがヴェニスの草分けである。此の地は軍事上險要な地であつたばかりでなく、其の潟は少なからぬ漁鹽の利を藏してゐた。ヴェニスの住民がおひ〳〵發達した其の資源は此等の利に依つて得たものである。それのみでなく、歐洲內地と東方諸國との交通の要路に當つてゐたので遂には中世第一の商業市

ヴェニスとゴンドラ

といはれるばかりの盛況を呈するに至つた。

ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに安全な生活を營むことが出來、水あればこそ漁鹽の利を收めることが出來、水あればこそ更に四方に航海通商を試みることが出來たのだ。その美しい風景も亦全く水の賜に

ヴェナス Venus ローマ神話の中にある女神

マラモッコー Malamocco

ゴンドラ Gondola ヴェニス特有の半月形の小舟

外ならぬ。

此の如くして、ヴェニスは全く水から生れたやうなものだ。ヴェナスの女神は水に浮ぶ泡から生れたが、ヴェニスの都も亦それに似たものといへよう。始め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコーにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縦横に多數の運河が通じて居る。そして人は此の水の通りをゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて往來する。

多くの人家は直ちに水に臨んでゐるから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラの船は直ちに此の戸口に着けることが

出來る。他の都市ではけたゝましい自動車の警笛や敷石を軋る轍の音で喧しいのに、ヴェニスでは水を分けゆく靜かな櫂の音が聞かれるばかりだ。文明の進歩した今日、此の如き都市は實に世界に稀なものといつてよい。

あゝ水に浮ぶヴェニスの都、寺院に宮殿に其の榮華を語る大廈高樓が、色さま〴〵の大理石に時代の古びを見せて、一灣の水、晝の靜けさに眠る上に蜃氣樓と見紛ふばかり浮び出る時、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の、滑かなる水面をたゆたふ時、或は又遠く銀波の靡けるが如く、潟の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來る時、若しくは月靜かなる夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る街の燈火を櫂の先

アドリヤ海 Adriatic Sea 伊太利半島の東にある海
小亞細亞 Asia Minor 亞細亞土耳其の一部
シリヤ Syria 亞細亞の西部地中海沿岸の地方
埃及 Egypt 亞弗利加東北部の國

にかき亂して行く時、水に浮ぶヴェニスの都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美は卽ち水の美に外ならぬ。

併しヴェニスが水に負ふところは、たゞに其の美觀のみではない。ヴェニスは實に水の爲に立派な海港となることが出來たのだ。卽ちその住民は水を利用してアドリヤ海から遠く東に航し、小亞細亞・シリヤ・埃及の沿岸にも通商貿易を試みた。從つてアドリヤ海はヴェニスの爲には貴重なものであつて、これがなければあの樣な發達は到底望まれなかつたのである。さればこそ當のヴェニス人は、アドリヤ海をヴェニス市の夫と見たてたのである。

都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像ではないか。ヴェニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて、茲に昔床しい儀式が行はれた。それはヴェニスの町とアドリヤ海との結婚式である。それは市民が行ふ儀式の中で最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれた。此の日ヴェニスの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乘し、後には多數の貴族の船を從へ、美々しい行列をつくつて悠々と海上に漕出した。かくて長官はヴェニス市を代表して黄金の花環を海上に投じ、アドリヤ海と千年の契を籠めたのであつた。

夫アドリヤ海と妻ヴェニス。一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。自然なるその夫は朝夕の潮の滿干に洲崎

の岸を洗ひ、リヤルトの島をおとづれて千秋萬古何のかはりもないけれど、人爲の妻はその容姿が日に月に衰へて、今はその誇も榮華も一向に認められない。思うて此に至れば、誰しも多少の感慨なきを得ぬであらう。

（ヴェニスとフロレンス）

昭和二年九月廿一日午後中に
全部すむ
藤谷節朗

中學國文教科書卷一終

文部省檢定濟
大正十五年二月十日 中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十年一月十一日訂正再版發行
明治四十三年十一月五日修正三版發行
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十四年十一月十五日修正五版發行
明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十月三十日修正七版發行
大正元年十二月廿三日修正八版發行
大正三年十月廿八日修正九版發行
大正四年一月五日修正十版發行
大正六年十月三十日修正十一版發行
大正七年一月五日修正十二版發行
大正十年十月廿八日修正十三版發行
大正十一年一月十日修正十四版發行
大正十二年十月十八日修正十五版發行
大正十四年十月廿八日修正十六版發行
大正十五年二月三日修正十七版印刷
大正十五年二月六日修正十七版發行

定價	
卷一・二	金四十六錢
卷三・四	金四十四錢
卷五・六	金四十七錢
卷七・八・十	金四十五錢
卷九	金四十二錢

大正十五年度臨時定價	
卷一・二	金七十八錢
卷三・四	金七十五錢
卷五・六	金八十錢
卷七・八・十	金七十七錢
卷九	金七十一錢

著作權所有

編者 吉田彌平
東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者兼印刷者 上原才一郎
東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店
東京市神田區通神保町六番地
（電話長大手七三四〇番）
（振替口座東京三二七番）

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御申越被下候はゞ直ちに御送附可致候

東京秀英舍印刷

中學校

格致中學

中學校

廣島

比婆

月	国	植	地	英	算	
火	漢	体	画	作	英	
水	英	算	歴	国	英	武
木	英	習	国	体	算	
金	英	体	地	修	漢	
土	国	植	英	数	算	

廣島比婆山内西

比婆郡山内西

広島大学図書
2000302011